

索
引
篇

凡例

- 一 これは本文篇（「水無瀬三吟百韻」「湯山三吟百韻」）に含まれてゐる全ての語の索引である。
- 二 見出し語（ゴチック）は全て五十音順とした。
- 三 複合語の扱ひについては下位の造語成分からも引き得るやうにした。また接辞の類もこれに準じて見出しを立てた。
- 四 引例はその句全体をやはり分ち書きにして収め、脚部にその句の整理番号を示した。
- 五 引例の排列は、單純語から複合語へ、助辞を有せぬものから有するものへ、と言ふ笠間索引叢刊43「極楽願往生歌・明恵上人歌集 本文と索引」以来の「本文と索引」叢刊の基準に従った。

水無瀬三吟百韻

あ

- あか・す (明かす) (他カ四・体)
 いたつらにあかす夜おほく 秋更て
 19
- あかつき・おき (既起き) (名)
 誰かこの暁おきを かさねまし
 65
- あき (秋) (名)
 いたつらにあかす夜おほく 秋更て
 19
- かりねの露の 秋の明ほの
 28
- 露ふかみ 霜さへしほる 秋の袖
 66
- 霜おく野原 秋は暮れけり
 6
- 秋はなと もらぬ岩屋も 時雨るらん
 57
- 山かつになと 春秋の しらるらん
 75
- あき・かぜ (秋風) (名)
 秋風の あら磯枕 ふしわひぬ
 89
- 身をあき風も 人たのめなり
 40
- あ・く (飽く) (自力四)
 あ・か (飽か) (末)
 君を置きて あかすも誰を 思ふらん
 37
- 峯の庵 木の葉の後も すみあかて
 63
- あけ・がた (明け方) (名)

- 舟さす音も しるき明けかた
 4
- あけ・そ・む (明け初む) (自マ下二)
 あけ・そ・め (明け初め) (用)
 灯をそむくる花に あけそめて
 81
- あけぼの (曙) (名)
 かりねの露の 秋の明ほの
 28
- あさ・なぎ (朝風) (名)
 朝なきの 空に跡なき 夜の雲
 61
- あさ・ゆふ (朝夕) (名)
 松の葉を たゞ 朝夕の 煙にて
 87
- あし・たづ (芦田鶴) (名)
 冬枯れの 芦たつわひて 立てる江に
 51
- あだ (徒) (名)
 あたの大野を 心なる人
 92
- あと (後) (名)
 峯の庵 木の葉の後も すみあかて
 63
- あと (跡) (名)
 朝なきの 空に跡なき 夜の雲
 61
- たちちねの 遠からぬ跡に なくさめよ
 41
- 見しはみな 故郷人の 跡もなし
 21
- あはれ (哀) (形動ナリ)
 置きわふる 露こそ花に あはれなれ
 13
- あ・ふ (逢ふ) (自ハ四・体)
 逢まてと 思の露の きえかへり
 45
- あめ (雨) (名)
 ゆく人かすむ 雨の暮れかた
 78

あやーにく〔形動ナリ〕	
昔よりたゞあやにくの恋の道	
あらいそーまくら〔荒磯枕〕〔名〕	
秋風のあら磯枕 ふしわひぬ	89
あらし〔嵐〕〔名〕	
山ふかき里や嵐におくるらん	
あらーた〔荒田〕〔名〕	
かたはらに垣穂のあら田かへし捨て	77
あらは〔形動ナリ〕	
垣根をとへは あらはなる路	8
あらまし〔名〕	
鐘にわれたゞあらましの寝覚して	49
あ・り〔有り・在り〕〔自ラ変〕	
あ・り〔有り・在り〕〔用〕	
いやしきも身ををさむるは 有つへし	99
あ・る〔有る・在る〕〔体〕	
心あるかきりそしるき世捨人	59
今更にひとりある身を思ふなよ	11
あ・れ〔有れ・在れ〕〔已〕	
身のうき宿も名残りこそあれ	40
い	
いかに〔如何に〕〔副〕	
浦わの里はいかにすむらん	88
いそーまくら〔磯枕〕〔名〕	
秋風のあら磯枕 ふしわひぬ	89

いくーしもよ〔幾霜夜〕〔名〕	
山はけさいく霜夜にか霞むらん	
いただ・く〔頂く〕〔他カ四〕	
いただ・き〔頂き〕〔用〕	
いたゞきけりな夜なくの霜	50
いたづら〔徒ら〕〔形動ナリ〕	
いたづらにあかす夜おほく秋更て	12
いつ〔何時〕〔代名〕	
思へはいつをいにしへにせむ	92
い・づ〔出づ〕〔自ラ下二〕	
い・づる〔出づる〕〔体〕	
おさまる浪に舟いつる見ゆ	60
仏たち隠れては又いつる世に	95
いづーく〔何処〕〔代名〕	
ゆくへなき霞やいつくはてならん	53
いづーち〔何処〕〔代名〕	
心細しやいつちゆかまし	34
いと・ふ〔厭ふ〕〔他ハ四・終〕	
宿りせん野を驚や厭ふらむ	79
いにしへ〔古〕〔名〕	
思へはいつを いにしへにせむ	94
いのち〔命〕〔名〕	
命のみ待つことにするきぬくに	35
いはーや〔岩屋〕〔名〕	
秋はなともらぬ岩屋も時雨るらん	57
いほ〔庵〕〔名〕	

峯の庵 木の葉の後も すみあかて
 煙のとかに見ゆる飯庵
 いまーさら (今更) (形動ナリ)
 今更に ひとりある身を 思ふなよ
 いまーは (今は) (名)
 今のはよはひ山もたつねし
 きけはいまはの春のかりかね
 いや・し (卑し) (形シク)
 いや・しき (卑しき) (体)
 いやしきも 身ををさむるは 有つへし
 いろ (色) (名)
 色もなき ことの葉をたに 哀しけれ
 う
 う・う (植う) (他ワ下二)
 う・ゑ (植ゑ) (末)
 植ゑぬ草葉の しけき柴の戸
 うきーよ (憂き世) (名)
 さてもうき世に かゝる玉の緒
 うぐひーす (鶯) (名)
 宿りせん 野を鶯や 厭ふらむ
 う・し (憂し) (形ク)
 う・き (憂き) (体)
 なれぬすまるそ さひしさもうき
 身のうき宿も 名残りこそあれ
 さてもうき世に かゝる玉の緒

86 40 10 79 86 79 23 99 26 84 12 98 63

うす・し (薄し) (形ク)
 うす・き (薄き) (体)
 冴ゆる日も 身は袖うすき 暮ことに
 うすーはなすすき (薄花薄) (名)
 うす花すゝき 散らまくも惜し
 うちーかす・む (打籠む) (自マ四・体)
 また残る日の うちかすむ影
 う・つ (打つ) (他タ四・体)
 吹きくる風は 衣うつ声
 うつつ (現) (名)
 忘るなよ かきりやはる 夢うつ、
 うづら (鶉) (名)
 鶉なく かた山くれて 寒き日に
 うつろ・ふ (移ふ) (自ハ四)
 うつろ・は (移は) (末)
 うつろはむとは かねて知らすや
 うつろ・ふ (移ろふ) (体)
 小萩原 うつろふ露も 猶やみん
 うと・し (疎し) (形ク)
 うと・き (疎き) (体)
 うときも 誰か こゝろなるへき
 うはーかせ (上風) (名)
 夢にうらむる 萩の上風
 うまれーく (生れ来) (自力変)
 うまれーこ (生れ来) (末)
 又生れこぬ法を 聴かはや

44 20 72 91 12 59 93 30 14 68 31

- うめ〔梅〕〔名〕
行く水遠く 梅にほふ里 2
- うらみ〔恨み〕〔名〕
草木さへふるき都の恨にて 39
- うら・む〔恨む〕〔他マ上二〕
うら・むる〔恨むる〕〔体〕
夢にうらむる 荻の上風 20
- うらめ・し〔恨めし〕〔形シク・終〕
わすられかたき 世さへうらめし 74
- うら・わ〔浦和〕〔名〕
浦わの里は いかにすむらん 88
- え
え〔江〕〔名〕
冬枯れの 芦たつわひて 立てる江に 51
- お
おい〔老〕〔名〕
老のゆくへよ 何にかゝらむ 22
- おき〔起き〕〔名〕
誰かこの 曉おきを かさねまし 65
- おき・わ・ぶ〔置き侘ぶ〕〔自バ上二〕
おき・わ・ぶる〔置き侘ぶる〕〔体〕
置きわぶる 露こそ花にあはれなれ 13
- お・く〔置く〕〔他カ四〕
お・き〔置き〕〔用〕
- 君を置きて あかすも誰を 思ふらん
置きわぶる 露こそ花にあはれなれ 13 37
- お・く〔置く〕〔体〕
霜おく野原 秋は暮れけり 6
- おく・る〔後る〕〔自下二・終〕
山ふかき 里や嵐におくるらん 9
- おし・な・ぶ〔押し並ぶ〕〔他バ下二〕
おし・な・べ〔押し並べ〕〔用〕
人におしなへ 道は正しき 100
- お・つ〔落つ〕〔自タ四〕
お・ち〔落ち〕〔用〕
茂みよりたえくのこる 花落ちて 55
- おと〔音〕〔名〕
舟さす音も しるき明けかた 4
- おほ・し〔多し〕〔形ク〕
おほ・く〔多く〕〔用〕
いたつらにあかす夜おほく 秋更て 19
- おほ・の〔大野〕〔名〕
あたの大野を 心なる人 92
- おほろ・け〔麗け〕〔形動ナリ〕
おほろけの 月かは人もまてしはし 27
- おも・かけ〔面影〕〔名〕
その佛に 似たるたになし 38
- おもひ〔思〕〔名〕
逢まてと 思の露の きえかへり
帰りは 待ちし思を 人やみむ 75 45

	おもひ・た・ゆ (思ひ絶ゆ) (他ヤ下二)	
	おもひ・た・え (思ひ絶え) (用)	
	契りはや思ひたえつゝ、年も経ぬ	83
	おも・ふ (思ふ) (自ハ四)	
	おも・ひ (思ひ) (用) …おもひ・た・ゆ (前項)	
	おも・ふ (思ふ) (終)	
	今更にひとりある身を思ふなよ	11
	君を置きてあかすも誰を思ふらん	37
	おも・へ (思へ) (已)	
	思へはいつをいにしへにせむ	94
	か	
	か (係助)	
	誰かこの暁おきを かさねまし	65
	うときも誰かこゝろなるへき	72
	(に・か)	
	山はけさいく霜夜にか霞むらん	97
	(か・は)	
	おほろけの月かは人もまてしはし	27
	か (格助)	
	誰か枕に夢は見えけん	82
	わか草枕 月ややつさむ	18
	かか・る (懸る) (自ラ四)	
	かか・ら (懸ら) (未)	
	老のゆくへよ 何にかゝらむ	22
	さてもうき世にかゝる玉の緒	86
	かき・ね (垣根) (名)	
	垣根をとへはあらはなる路	
	かき・ほ (垣穂) (名)	
	かたはらに垣穂のあら田かへし捨て	77
	かぎり (限り) (名)	
	心あるかきりそしるき世捨人	59
	この岸をもちろこし舟のかきりにて	43
	忘るなよ かきりやかはる 夢うつゝ	93
	かく・す (隠す) (他サ四)	
	かくす身を人はなきにもなしつらむ	85
	かく・る (隠る) (自ラ四)	
	かく・れ (隠れ) (用)	
	仏たち隠れては又いつる世に	95
	かげ (影) (名)	
	また残る日のうちかすむ影	14
	小夜もしつかに桜咲くかけ	80
	かさ・ぬ (重ね) (他ナ下二)	
	かさ・ね (重ね) (未)	
	誰かこの暁おきを かさねまし	65
	かすみ (霞) (名)	
	ゆくへなき霞やいつくはてならん	53
	かす・む (霞む) (自マ四・終)	
	山はけさいく霜夜にか霞むらん	97
	かす・む (霞む) (体)	
	雪なから山もとかすむ 夕かな	1
	ゆく人かすむ 雨の暮れかた	78

	また残る日の うちかすむ影				
	かぜ (風) (名)				
14	吹きくる風は衣うつ声	30			
	秋風の あら磯枕 ふしわひぬ	89			
	身をあき風も 人たのめなり	46			
	河風に 一むら柳 春見えて	3			
	夢にうらむる 萩の上風	20			
	枯れし林も 春風ぞ吹く	96			
	さひしさならふ 松風の声	64			
	夕汐風の 遠つ舟人	52			
	かた (方) (名)				
	くるかた見えぬ 山里の春	54			
	ゝがた (方) (接尾)				
4	舟さす音も しるき明けかた	4			
	ゆく人かすむ 雨の暮れかた	78			
	かた・し (難し) (形ク)				
	かた・き (難き) (体)				
	わすられかたき 世さへうらめし	74			
	かたはら (傍) (名)				
	かたはらに 垣穂のあら田 かへし捨て	78			
	かたゝやま (片山) (名)				
	鶉なくかた山くれて 寒き日に	69			
	かな (終助)				
	雪なから 山もとかすむ 夕かな	1			
	かな・し (哀し) (形シク)				
	かな・しき (哀しき) (体)				
	月はしるやの旅そかなしき				
	かな・しけれ (哀しけれ) (已)				
66	色もなきこと の葉をたに 哀しけれ	23			
	かね (鐘) (名)				
	鐘にわれたゝ あらましの 寝覚して	49			
	かねゝて (予ねて) (副)				
	うつろはむとは かねて知らすや	12			
	かゝは (連助)				
	おほろけの 月かは人も まてしはし	27			
	かはゝかぜ (河風) (名)				
	河風に 一むら柳 春見えて	3			
	かは・る (変る) (自ハ四・体)				
	忘るなよ かきりやはる 夢うつゝ	94			
	かひゝな・し (甲斐無し) (形ク)				
	かひゝな・き (甲斐無き) (体)				
	松虫の なく音かひなき 蓬生に	47			
	かへしゝす・つ (返し捨て) (他タ下二)				
	かへしゝす・て (返し捨て) (用)				
	かたはらに 垣穂のあら田 かへし捨て	77			
	かへ・す (返す) (他タ下二)				
	かへ・し (返し) (用) ↓かへしゝす・つ (前項)				
	かへりゝく (返り来) (自力変)				
	かへりゝこ (返り来) (未)				
	帰りこは 待ちし思を 人やみむ	71			
	かへ・る (返る・帰る) (自ラ四)				
	かへり (返り・帰り) (用)				

逢まてと 思の露の きえかへり 45
 帰りこは 待ちし思を 人やみむ 71
 かへる (帰る) (終)
 暮れぬとや 鳴きつつ鳥の 帰るらむ 15
 かみかぜ (上風) (名)
 夢にうらむる 荻の上風 20
 かり (雁) (名)
 雁なく山の 月更くる空 90
 かりいほ (仮庵) (名)
 煙のとかに 見ゆる仮庵 98
 かりがね (雁) (名)
 きけはいまはの 春のかりかね 26
 かりね (仮寝) (名)
 かりねの露の 秋の明ほの 28
 かふる (枯る) (自ラ下二)
 かれ (枯れ) (用)
 枯れし林も 春風そ吹く 96
 鳴く虫の 心ともなく 草かれて 7
 しがれ (枯れ) (名)
 冬枯れの 芦たつわひて 立てる江に 51

き

き (木) (名)
 草木さへ ふるき都の 恨にて 32
 たのむもはかな 爪木とる山 39
 き (助動)

32 39 51 7 96 28 26 98 90 20 15 71 45

し (体)
 枯れし林も 春風そ吹く 96
 帰りこは 待ちし思を 人やみむ 71
 見しはみな 故郷人の 跡もなし 12
 きえかへる (消え返る) (自ラ四)
 きえかへり (消え返り) (用)
 逢まてと 思の露の きえかへり 45
 きく (聞く・聴く)
 きか (聞か・聴か) (末)
 又生れこぬ 法を聴かはや 44
 きけ (聞け・聴け) (已)
 きけはいまはの 春のかりかね 26
 きし (岸) (名)
 この岸を もろこし舟の かきりにて 43
 きぬぎぬ (衣衣) (名)
 命のみ 待つことにする きぬくに 35
 きみ (君) (名)
 君を置きて あかすも 誰を 思ふらん 37
 きり (霧) (名)
 月や猶 霧わたる夜に 残るらん 5
 末野なる 里ははるかに 霧立ちて 29

く

く (接尾)
 うす花すゝき 散らまくも 惜し 68
 く (来) (自力変)

68 29 5 37 35 43 26 44 45 12 71 96

こ(来)〔末〕

又生れこぬ 法を聴かはや
帰りこは 待ちし思を 人やみむ

71 44

くる(来る)〔体〕

くるかた見えぬ 山里の春

54

吹きくる風は 衣うつ声

30

くさ(草)〔名〕

鳴く虫の 心ともなく 草かれて

7

くさーき(草木)〔名〕

草木さへ ふるき都の 恨にて

39

くさーば(草葉)〔名〕

植えぬ草葉の しけき柴の戸

76

くさーまくら(草枕)〔名〕

わか草枕 月ややつさむ

18

くも(雲)〔名〕

朝なきの 空に跡なき 夜の雲

61

くゝる(暮る)〔自ラ下二〕

雲にけふ花ちりはつる 嶺こえて

25

くゝれ(暮れ)〔用〕

霜おく野原 秋は暮れけり

6

鶉なくかた山くれて 寒き日に

69

くれ(暮れ)〔名〕

暮れぬとや 鳴きつつ鳥の 帰るらむ

15

それも友なる 夕暮の空

24

くれゝがた(暮れ方)〔名〕

ゆく人かすむ 雨の暮れかた

78

くれゝこと(暮れ毎)〔名〕

冴ゆる日も 身は袖うすき 暮ことに

31

け

け(接尾)〔形動ナリ〕

おほろけの 月かは人も までしはし

27

けーさ(今朝)〔名〕

山はけさ いく霜夜にか 霞むらん

97

けーふ(今日)〔名〕

雲にけふ 花ちりはつる 嶺こえて

25

けぶり(煙)〔名〕

煙のとかに 見ゆる 仮庵

98

松の葉を たゝ朝夕の 煙にて

87

けむ(助動・体)

誰か手枕に 夢は見えけん

82

けり(助動・終)

いたゝきけりな 夜なくの 霜

50

霜おく野原 秋は暮れけり

6

苔のたもとに 月はなれけり

58

こ

こ(此)〔代名〕

誰かこの 暁おきをかさねまし

65

この岸を もろこし舟の かきりにて

43

さりともこの 世の道は つきはてゝ

33

こけ(苔)〔名〕

昔のたもとに 月はなれけり	58	猶なになれや 人の恋しき	36
二ころ (心) (名)		二・ゆ (越ゆ) (他ヤ下二)	
心ある かきりそしるき 世捨人	59	二・え (越え) (用)	
鳴く虫の 心ともなく 草かれて	7	雲にけふ 花ちりはつる 嶺こえて	25
あたの大野を 心なる人	92	ころも (衣) (名)	
うときも 誰か 二ころなるへき	72	吹きくる風は 衣うつ声	30
二ころ ぼそし (心細し) (形ク・終)		晴るまも 袖はしくれの 旅衣	17
心細しや いつちゆかまし	34	二系 (声) (名)	
二そ (係助)		吹きくる風は 衣うつ声	30
置きわふる 霧こそ花にあはれなれ	13	さひしさならふ 松風の声	64
身のうき宿も 名残りこそあれ	40	さ	
二ことに (毎に) (接尾)		一さ (接尾)	
命のみ待つことにする きぬくに	35	さひしさならふ 松風の声	64
冴ゆる日も 身は袖うすき 暮二ことに	31	なれぬすまぬそ さひしさもうき	10
二ことの一は (言の葉) (名)		木のした分る 道の露けさ	56
色もなき 二ことの葉をたに 哀しけれ	23	さ・く (咲く) (自カ四・体)	
二一のーした (木の下) (名)		小夜もしつかに 桜咲くかけ	80
木のした分る 道の露けさ	56	さくら (桜) (名)	
二一のーは (木の葉) (名)		小夜もしつかに 桜咲くかけ	80
峯の庵 木の葉の後も すみあかて	63	さ・す (自サ四・体)	
二はぎ ーはら (小萩原) (名)		舟さす音も しるき明けかた	4
小萩原 うつろふ露も 猶やみん	91	さてーも (連語)	
二ひ (恋) (名)		さてもうき世にかゝる 玉の緒	86
昔よりたゝあやにくの 恋の道	73	さと (里) (名)	
二ひ・し (恋し) (形シク)		行く水遠く 梅にほふ里	2
二ひ・しき (恋しき) (体)			

	末野なる里ははるかに霧立ちて	29		今更にひとりある身を思ふなよ	11
	浦わの里はいかにすむらん	88		さりーとも〔副〕	
	野となる里も侘ひつゝそすむ	70		さりーともこの世の道はつきはてゝ	33
	山ふかき里や嵐におくるらん	9		し	
	くるかた見えぬ山里の春	54		し〔副助〕	
	さびしーさ〔寂しき〕〔名〕	64		〔しーも〕	
	さひしさならふ松風の声	10		小萩原 うつろふをしも 猶やみん〔桂本〕	91
	なれぬすまゐそ さひしさもうき	67		じ〔助動・終〕	
	さへ〔副助〕	39		今はのよはひ山もたつねし	84
	草木さへふるき都の恨にて	47		しぐゝる〔時雨る〕〔自ラ下二・終〕	
	露ふかみ霜さへしほる 秋の袖	67		秋はなともらぬ岩屋も 時雨るらん	57
	わすられかたき世さへうらめし	69		しぐれ〔時雨〕〔名〕	
	さむ・し〔寒し〕〔形ク〕	80		暗るゝまも 袖はしくれの 旅衣	17
	さむ・き〔寒き〕〔体〕	69		しげ・し〔繁し〕〔形ク〕	
	鶉なくかた山くれて 寒き日に	49		しげ・き〔繁き〕〔体〕	
	ーざめ〔覚〕〔接尾〕	67		植えぬ草葉の しけき柴の戸	76
	鐘にわれたゝあらしの 寢覚して	31		しーげみ〔茂み〕〔名〕	
	さやけ・し〔形ク〕	80		茂みよりたえくのこる 花落ちて	55
	さやけ・き〔体〕	67		した〔下〕〔名〕	
	雪にさやけき 四方の遠山	56		木のした分る 道の露けさ	56
	さ・ゆ〔牙ゆ〕〔自ヤ下二〕	80		しづか〔静か〕〔形動ナリ〕	
	さ・ゆる〔牙ゆる〕〔体〕	31		小夜もしつかに 桜咲くかけ	80
	牙ゆる日も 身は袖うすき 暮ことに	80		しば〔柴〕〔名〕	
	さーよ〔小夜〕〔名〕	80		しばーのーと〔柴の戸〕〔名〕	
	小夜もしつかに 桜咲くかけ	76		植えぬ草葉の しけき柴の戸	76
	さらーに〔更に〕〔形動ナリ〕				

しばし(暫)(副)	おほろけの月かは人もましてしはし	27
しほーかぜ(潮風)(名)	夕汐風の遠つ舟人	52
しほ・る(絞る)(他ラ四・体)	露ふかみ霜さへしほる 秋の袖	67
しめ(標)(名)	しめゆふ山は月のみそすむ	48
しも(霜)(名)	霜おく野原 秋は暮れけり いたゞきけりな 夜な〜の霜 露ふかみ霜さへしほる 秋の袖	67 50 6
しも(運動)	小萩原 うつろふをしも 猶やみん(桂本)	91
しもーよ(霜夜)(名)	山はけさいく霜夜にか霞むらん	97
し・る(知)(他ラ四)	し・ら(知ら)(末)	12
し・ら(知ら)(末)	うつろはむとはかねて知らすや 山かつになと春秋のしらるらん	75
し・る(知る)(他ラ四・終)	月はしるやの旅そかなしき	66
しる・し(著し)(形ク)	しる・き(著き)(体)	4
舟さす音も しるき明けかた 心ある かきりそしるき 世捨人		59

す		
す(為)(自サ変)	思へはいつをいにしへにせむ 宿りせん野を鶯や厭ふらむ	94
せ(為)(末)	し(為)(用)	79
す(為)(体)	鐘にわれたゝあらましの寢覚して	49
する(為)(体)	命のみ待つことにする きぬ〜に	35
ず(助動・終)	君を置きてあかすも誰を思ふらん うつろはむとはかねて知らすや	12 37
ぬ(体)	又生れこぬ 法を聴かはや 植承ぬ草葉のしけき柴の戸 たらちねの 遠からぬ跡になくさめよ なれぬすまるそ さひしさもうき くるかた見えぬ 山里の春	44 76 41 10 54
すすき(薄)(名)	秋はなと もらぬ岩屋も 時雨るらん	57
すすき(薄)(名)	うす花すすき 散らまくも惜し	68
す・つ(捨つ)(他タ下二)	す・て(捨て)(用)	77
すまひ(住まひ)(名)	かたはらに垣穂のあら田かへし捨て	77

	なれぬすまゐそさひしさもうき								
	すみ・あ・く〔住み飽く〕〔自カ四〕								
	すみ・あ・か〔住み飽か〕〔末〕								
	峯の庵木の葉の後も すみあかて								
	す・む〔住む〕〔自マ四〕								
	す・み〔住み〕〔用〕↓すみ・あ・く〔前項〕								
	す・む〔住む〕〔終〕								
	浦わの里はいかにすむらん								
	す・む〔住む〕〔体〕								
	野となる里も 佗つつゝそすむ								
	す・む〔澄む〕〔自マ四・体〕								
	しめゆふ山は月のみそすむ								
	す系〔末〕〔名〕								
	月日のす系や 夢にめくらん								
	す系一の〔末野〕〔名〕								
	末野なる 里ははるかに 霧立ちて								
	そ								
	そ〔其〕〔代名〕								
	その佛に 似たるたになし								
	ぞ〔係助〕								
	心ある かきりそしるき 世捨人								
	なれぬすまゐそさひしさもうき								
	月はしるやの 旅そかなしき								
	枯れし林も 春風そ吹く								
	しめゆふ山は 月のみそすむ								
48		48		48		48		48	
69		69		69		69		69	
66		66		66		66		66	
10		10		10		10		10	
59		59		59		59		59	
38		38		38		38		38	
	野となる里も 佗ひつゝそすむ								
	そで〔袖〕〔名〕								
	冴ゆる日も 身は袖うすき 暮ことに								
	露ふかみ 霜さへしほる 秋の袖								
	晴るゝまも 袖はしくれの 旅衣								
	そむ・く〔背く〕〔他カ下二〕								
	そむ・くる〔背くる〕〔体〕								
	灯をそむくる花に あけそめて								
	そら〔空〕〔名〕								
	それも友なる 夕暮れの空								
	雁なく山の 月更くる空								
	朝なきの 空に跡なき 夜の雲								
	み山をゆけは 分く空もなし								
	それ〔其〕〔代名〕								
	それも友なる 夕暮の空								
	た								
	た〔誰〕〔代名〕								
	誰か手枕に 夢は見えけん								
	た〔田〕〔名〕								
	かたはらに 垣穂のあら田 かへし捨て								
	たえ・だえ〔絶え絶え〕〔副〕								
	茂みより たえくのこる 花落ちて								
	ただ〔唯・只〕〔副〕								
	鐘にわれたゝあらしの 寝覚して								
	昔より たゝあやにくの 恋の道								
73		73		73		73		73	
49		49		49		49		49	
55		55		55		55		55	
77		77		77		77		77	
82		82		82		82		82	
24		24		24		24		24	
16		16		16		16		16	
61		61		61		61		61	
90		90		90		90		90	
24		24		24		24		24	
82		82		82		82		82	
17		17		17		17		17	
67		67		67		67		67	
31		31		31		31		31	
70		70		70		70		70	

松の葉をたゞ朝夕の煙にて	87	晴るゝまも袖はしくれの旅衣	17
ただ・し〔正し〕〔形シク〕		たまゝのゝを〔玉の緒〕〔名〕	
ただ・しき〔正しき〕〔体〕		さてもうき世にかゝる玉の緒	
人におしなへ道は正しき	100	たゝまくら〔手枕〕〔名〕	86
ゝたち〔達〕〔接尾〕		誰か手枕に夢は見えけん	
仏たち隠れては又いつる世に	95	たゝもと〔袂〕〔名〕	82
た・つ〔立つ〕〔自タ四〕		苔のたもとに月はなれけり	
た・ち〔立ち〕〔用〕		た・ゆ〔絶ゆ〕〔自ヤ下二〕	58
末野なる里ははるかに霧立ちて	29	た・え〔絶え〕〔用〕	
た・て〔立て〕〔命〕		契りはや思ひたえつゝ年も経ぬ	83
冬枯れの芦たつわひて立てる江に	51	たらちゝね〔垂乳根〕〔名〕	
たゝづ〔田鶴〕〔名〕		たらちねの遠からぬ跡になくさめよ	41
冬枯れの芦たつわひて立てる江に	51	たり〔助動〕	
たづ・ぬ〔尋ぬ・訪ぬ〕〔自ナ下二〕		たる〔体〕	
たづ・ね〔尋ね・訪ね〕〔未〕		その佛に似たるたになし	38
今はよはひ山もたつねし	84	たれ〔誰〕〔代名〕	
だに〔副助〕		誰かこの暁おきをかさねまし	65
その佛に似たるたになし	38	うときも誰かこゝろなるへき	72
色もなきことの葉をたに哀しけれ	23	君を置きてあかすも誰を思ふらん	37
たの・む〔頼む〕〔他マ四・体〕			
たのむもはかな爪木とる山	32	ち	
ゝだのめ〔頼め〕〔形動ナリ〕		ちぎり〔契り〕〔名〕	
身をあき風も人たのめなり	46	契りはや思ひたえつゝ年も経ぬ	83
たび〔旅〕〔名〕		ちりゝは・つ〔散り果つ〕〔自タ下二〕	
月はしるやの旅そかなしき	66	ちりゝは・つる〔散り果つる〕〔体〕	
たびゝころも〔旅衣〕〔名〕		雲にけふ花ちりはつる嶺こえて	25

ち・る(散る)(自ラ四)

ち・ら(散ら)(未)

うす花すゝき 散らまくも惜し

ち・り(散り)(用) ↓ちり・は・つ(前項)

つ

つ〔助動・終〕

いやしきも 身ををさむるは 有つへし

かくす身を 人はなきにも なしつらむ

つ〔格助〕

夕汐風の 遠つ舟人

つき(月)(名)

苔のたもとに 月はなれけり

雁なく山の 月更くる空

おほろけの 月かは人も まてしはし

しめゆふ山は 月のみそすむ

月はしるやの 旅そかなしき

月や猶 霧わたる夜に 残るらん

わか草枕 月ややつさむ

つき・は・つ(尽き果つ)(自タ下二)

つき・は・て(尽き果て)(用)

さりともこの世の道は つきはて、

つき・ひ(月日)(名)

月日のすゑや 夢にめくらん

つつ〔接助〕

契りはや 思ひたえつ、 年も経ぬ

暮れぬとや 鳴きつつ鳥の 帰るらむ

野となる里も 佗ひつゝそすむ

つま・ぎ(爪木)(名)

たのむもはかな 爪木とる山

つゆ(露)(名)

露ふかみ霜さへしほる 秋の袖

置きわふる 露こそ花にあはれなれ

かりねの露の 秋の明ほの

逢まてと 思の露の きえかへり

小萩原 うつろふ露も 猶やみん

つゆけ・さ(露けさ)(名)

木のした分る 道の露けさ

て

て〔接助〕

灯を そむくる花に あけそめて

草木さへふるき都の 恨にて

君を置きて あかすも誰を 思ふらん

茂みよりたえくのこる 花落ちて

この岸を もろこし舟の かきりにて

鳴く虫の 心ともなく 草かれて

鶉なく かた山くれて 寒き日に

松の葉を たゝ朝夕の 煙にて

雲にけふ 花ちりはつる 嶺こえて

末野なる 里ははるかに 霧立ちて

さりともこの世の道は つきはて、

68

52

85

99

58

90

27

48

66

5

18

22

33

42

83

15

70

32

67

13

28

45

91

56

81

39

37

55

43

7

69

87

25

29

33

鐘にわたれた、あらましの寤覚して
いたつらにあかす夜おほく 秋更で
冬枯れの芦たつわひて 立てる江に
〔副詞ヲ形ツクル〕

うつろはむとはかねて知らすや

〔てーは〕

仏たち隠れては又いつる世に

で〔接助〕

峯の庵 木の葉の後も すみあかて

と

と〔戸〕〔名〕

植ゑぬ草葉の しけき柴の戸

と〔格助〕

野となる里も 侘ひつゝそすむ

違までと 思の露の きえかへり

〔とーは〕

うつろはむとは かねて知らすや

〔とーも〕

鳴く虫の 心ともなく 草かれて

さりとももの この世の道は つきはてゝ

〔とーや〕

暮れぬとや 鳴きつつ鳥の 帰るらむ

とし〔年〕〔名〕

契りはや 思ひたえつゝ 年も経ぬ

と・ふ〔問ふ〕

49 19 51 12 95 63 76 45 70 12 7 33 15 83

と・へ〔問へ〕〔已〕

垣根をとへは あらはなる路

とほーつ〔遠〕〔形ク・語幹〕〔連体〕

夕汐風の 遠つ舟人

とほ・し〔遠し〕〔形ク〕

とほーか・ら〔遠から〕〔カリ末〕

たちねの 遠からぬ跡になくさめよ

とほ・く〔遠く〕〔用〕

行く水遠く 梅にほふ里

とほーやま〔遠山〕〔名〕

雪にさやけき 四方の遠山

とも〔友〕〔名〕

それも友なる 夕暮の空

ともしーび〔灯〕〔名〕

灯をそむくる花に あげそめて

とり〔鳥〕〔名〕

暮れぬとや 鳴きつつ鳥の 帰るらむ

と・る〔取る〕〔他ラ四・体〕

たのむもはかな 爪木とる山

な

な〔助詞〕

いたゝきけりな 夜なくの霜

今更に ひとりある身を 思ふなよ

忘るなよ かきりやはかる 夢うつゝ

ーな〔接尾〕

8 52 41 2 62 24 81 15 32 50 11 93

いたゞきけりな 夜な／＼の霜	50
・な〔形容詞ヲ形ツクル〕	
たのむもはかな 爪木とる山	32
ながら〔接助〕	
雪なから 山もとかすむ 夕かな	1
なき〔屈〕〔名〕	
朝なきの 空に跡なき 夜の雲	61
な・く〔鳴く〕〔自力四〕	
な・き〔鳴き〕〔用〕	
暮れぬとや 鳴きつつ鳥の 帰るらむ	15
な・く〔鳴く〕〔自力四・体〕	
鳴く虫の 心ともなく 草かれて	7
松虫の なく音かひなき 蓬生に	47
雁なく 山の 月更くる 空	90
鶉なく かた山 くれて 寒き日に	69
なぐさ・む〔慰む〕〔他マ下二〕	
なぐさ・め〔慰め〕〔命〕	
たちねの 遠からぬ 跡になくさめよ	41
なごり〔名残〕〔名〕	
身のうき 宿も 名残りこそあれ	40
な・し〔無し〕〔形ク〕	
な・く〔無く〕〔用〕	
鳴く虫の 心ともなく 草かれて	7
な・し〔無し〕〔終〕	
その 佛に 似たる になし	38
見しは みな 故郷人の 跡もなし	21

み山をゆけは 分く 空もなし	16
な・き〔無き〕〔体〕	
朝なきの 空に跡なき 夜の雲	61
ゆくへなき 霞やいつく はてならん	53
かくす身を 人はなきにも なしつらむ	85
色もなき ことの 葉をたに 哀しけれ	23
松虫の なく音かひなき 蓬生に	47
な・す〔為す〕〔他サ四〕	
な・し〔為し〕〔用〕	
かくす身を 人はなきにも なしつらむ	85
など〔副〕	
秋は などもらぬ 岩屋も 時雨るらん	57
山かつに など 春秋の しらるらん	75
なに〔何〕〔副〕	
老のゆくへよ 何にかゝらむ	22
猶なになれや 人の 恋しき	36
な・ぶ〔並ぶ〕〔他バ下二〕	
な・べ〔並べ〕〔用〕	
人におしなへ 道は 正しき	100
なほ〔猶〕〔副〕	
月や 猶 霧わたる 夜に 残るらん	5
猶なになれや 人の 恋しき	36
小萩原 うつろふ 露も 猶やみん	91
なみ〔波・浪〕〔名〕	
おさまる 浪に 舟いつる 見ゆ	60
なら・ふ〔慣ふ〕〔自ハ四・体〕	

さひしきならふ 松風の声
なり(助動) 64

なら(未)

ゆくへなき霞やいつくはてならん

なり(終) (形動語尾)

身をあき風も 人たのめなり

なる(体) (形動語尾ヲ含ム)

あたの大野を 心なる人

うときも誰か ころなるへき

末野なる 里ははるかに霧立ちて

それも友なる 夕暮の空

垣根をとへは あらはなる路

なれ(已) (形動語尾ヲ含ム)

猶なになれや 人の恋しき

置きわふる 露こそ花にあはれなれ

な・る(慣る・馴る)(自ラ下二)

な・れ(慣れ・馴れ)(未)

なれぬすまゐそ さひしきもうき

な・る(成る)(自ラ四)

野となる里も 侘ひつゝそすむ

に

に(格助) (副詞ヲ形ツクル「に」ヲ含ム)

たちちねの 遠からぬ跡になくさめよ

山ふかき 里や嵐におくるらん

思へはいつを いにしへにせむ

94 9 41 70 10 13 36 8 24 29 72 92 46 53 64

さてもうき世にかゝる玉の緒
冬枯れの 芦たつわひて 立てる江に
その佛に 似たるたになし

かたはらに 垣穂のあら田 かへし捨て
鐘にわれたゝ あらましの 寝覚して

河風に 一むら柳 春見えて

命のみ 待つことに するきぬくに

雲にけふ 花ちりはつる 嶺こえて

冴ゆる日も 身は袖うすき 暮ることに

朝なきの 空に跡なき 夜の雲

誰か 手枕に 夢は見えけん

苔のたもとに 月はなれけり

老のゆくへよ 何にかゝらむ

おさまる浪に 舟いつる見ゆ

置きわふる 露こそ花にあはれなれ

灯をそむくる花に あけそめて

鶉なく かた山くれて 寒き日に

人におしなへ 道は正しき

命のみ 待つことに するきぬくに

山かつに なんと 春秋の しらるらん

雪に さやけき 四方の 遠山

夢に うらむる 荻の上風

月日の すすや 夢に めくらん

月や 猶霧わたる夜に 残るらん

仏たち 隠れては 又いつる世に

松虫の なく音か ひなき 蓬生に

47 95 5 42 20 62 75 35 100 69 81 13 60 22 58 82 61 31 25 35 3 49 77 38 51 86

浦わの里はいかにすむらん

いたつらにあかす夜おほく秋更て

今更にひとりある身を思ふなよ

小夜もしつかに桜咲くかけ

煙のとかに見ゆる仮庵

末野なる里ははるかに霧立ちて

〔にーか〕

山はけさいく霜夜にか霞むらん

〔にーて〕

草木さへふるき都の恨にて

この岸をもろこし舟のかきりにて

〔にーも〕

かくす身を人はなきにもなしつらむ

にほ・ふ〔匂ふ〕〔自ハ四・体〕

行く水遠く梅にほふ里

にる〔似る〕〔自ナ上ー〕

に〔似〕〔用〕

その俤に似たるたになし

ぬ

ぬ

ぬ〔助動・終〕

暮れぬとや鳴きつつ鳥の帰るらむ

秋風のあら磯枕ふしわひぬ

契りはや思ひたえつゝ年も経ぬ

ね

ね〔音〕〔名〕

松虫のなく音かひなき蓬生に

ね〔寝〕〔名〕

かりねの露の秋の明ほの

ねーざめ〔寝覚め〕〔名〕

鐘にわれたゝあらましの寢覚して

の

の〔野〕〔名〕

野となる里も侘ひつゝそすむ

の〔格助〕

あたの大野を心なる人

末野なる里ははるかに霧立ちて

宿りせん野を鴛や厭ふらむ

の〔格助〕

逢まてと思の露のきえかへり

山かつになと春秋のしらるらん

猶なになれや人の恋しき

かりねの露の秋の明ほの

露ふかみ霜さへしほる秋の袖

秋風のあら磯枕ふしわひぬ

朝なきの空に跡なき夜の雲

松の葉をたゝ朝夕の煙にて

あたの大野を心なる人

ゆく人かすむ雨の暮れかた

88

19

11

80

98

29

97

39

43

87

85

2

38

15

89

83

47

28

49

70

92

29

79

45

75

36

28

67

89

61

87

92

78

昔よりたゝあやにくの恋の道
 鐘にわれたゝあらましの寝覚して
 きけはいまはの春のかりかね
 今のはよはひ山もたつねし
 浦わの里はいかにすむらん
 老のゆくへよ何にかゝらむ
 おほろけの月かは人もまてしはし
 逢まてと思の露のきえかへり
 かたはらに垣穂のあら田かへし捨て
 かりねの露の 秋の明ほの
 植ゑぬ草葉の しけき柴の戸
 木のした分る 道の露けき
 苔のたもとに 月はなれけり
 峯の庵 木の葉の後も すみあかて
 昔よりたゝあやにくの 恋の道
 晴るゝまも 袖はしくれの 旅衣
 植ゑぬ草葉の しけき柴の戸
 さてもうき世にかゝる玉の緒
 たらちねの 遠からぬ跡になくさめよ
 月日のすゑや 夢にめくらん
 かりねの露の 秋の明ほの
 暮れぬとや 鳴きつつ鳥の 帰るらむ
 きけはいまはの 春のかりかね
 また残る日の うちかすむ影
 冬枯れの 芦たつわひて 立てる江に
 見しはみな 故郷人の 跡もなし

21 51 14 26 15 28 42 41 86 76 17 73 63 58 56 76 28 77 45 27 22 88 84 26 49 73

松の葉をたゝ朝夕の煙にて
 さひしきならふ 松風の聲
 松虫の なく音かひなき 蓬生に
 身のうき宿も 名残りこそあれ
 木のした分る 道の露けき
 峯の庵 木の葉の後も すみあかて
 草木さへふるき都の 恨にて
 鳴く虫の 心ともなく 草かれて
 この岸を もろこし舟の かきりにて
 雁なく山の 月更くる空
 くるかた見えぬ 山里の 春
 それも友なる 夕暮の空
 夕汐風の 遠つ舟人
 さりともの この世の道は つきはてゝ
 朝なきの 空に跡なき 夜の雲
 いたゝきけりな 夜な／＼の 霜
 雪にさやけき 四方の 遠山
 夢にうらむる 荻の上風
 峯の庵 木の葉の後も すみあかて
 色もなき ことの葉をたに 哀しけれ
 誰かこの 暁おきを かさねまし
 この岸を もろこし舟の かきりにて
 さりともの この世の道は つきはてゝ
 その俤に 似たるたになし
 さりともの この世の道は つきはてゝ
 月はしるやの 旅そかなしき

66 33 38 33 43 65 23 63 20 62 50 61 33 52 24 54 90 43 7 39 63 56 40 47 64 87

のこる(残る)〔自ラ四〕

のこる(残る)〔終〕

月や猶霧わたる夜に残るらん

のこる(残る)〔体〕

茂みよりたえくのこる花落ちて

また残る日のうちかすむ影

のどか〔長閑〕〔形動ナリ〕

煙のどかに見ゆる飯庵

のーはら〔野原〕〔名〕

霜おく野原秋は暮れけり

のみ〔副助〕

命のみ待つことにするきぬくに

しめゆふ山は月のみそすむ

のり〔法〕〔名〕

又生れこぬ法を聴かはや

は

は〔葉〕〔名〕

松の葉をたゝ朝夕の煙にて

峯の庵木の葉の後もすみあかて

植ゑぬ草葉のしげき柴の戸

は〔係助〕

霜おく野原秋は暮れけり

秋はなともらぬ岩屋も時雨るらん

きけはいまはの春のかりかね

吹きくる風は衣うつ声

30 26 57 6 76 63 87 44 48 35 6 98 14 55 5

末野なる里ははるかに霧立ちて

浦わの里はいかにすむらん

晴るまも袖はしくれの旅衣

月はしるやの旅そかなしき

かくす身を人はなきにもなしつらむ

冴ゆる日も身は袖うすき暮ことに

さりともこの世の道はつきはて、

人におしなへ道は正しき

しめゆふ山は月のみそすむ

山はけさいく霜夜にか霞むらん

誰か手枕に夢は見えけん

見しはみな故郷人の跡もなし

いやしきも身をささむるは有つへし

〔かーは〕

おほろけの月かは人もまてしはし

〔てーは〕

仏たち隠れては又いつる世に

〔とーは〕

うつろはむとはかねて知らすや

ば〔接助〕

帰りこは待ちし思を人やみむ

きけはいまはの春のかりかね

思へはいつをいにしへにせむ

垣根をとへはあらはなる路

み山をゆけは分く空もなし

はかな〔形ク・語幹〕

16 8 94 26 71 12 95 27 99 21 82 97 48 100 33 31 85 66 17 88 29

たのむもはかな 爪木とる山
 はぎーはら (萩原) (名) 32
 小萩原 うつろふ露も 猶やみん
 は・つ (果つ) (自タ下二) 91
 は・つる (果つる) (体)
 雲にけふ花ちりはつる 嶺こえて
 はて (果て) (名) 25
 ゆくへなき 霞やいつく はてならん
 はな (花) (名) 53
 雪にけふ花ちりはつる 嶺こえて
 茂みよりたえくのこる 花落ちて
 置きわふる 露こそ花にあはれなれ
 灯をそむくる花にあけそめて
 はな・すすき (花薄) (名) 81
 うす花すすき 散らまくも惜し
 はな・る (離る) (自ラ下二) 68
 はな・れ (離れ) (用)
 苔のたもとに 月はなれけり
 はや (早) (副) 58
 契りはや 思ひたえつゝ 年も経ぬ
 ばーや (終助) 83
 又生れこぬ 法を聴かはや
 はやし (林) (名) 44
 枯れし林も 春風そ吹く
 はら (原) (名) 96
 小萩原 うつろふ露も 猶やみん

91 96 44 83 58 68 81 13 55 25 53 25

霜おく野原 秋は暮れけり
 はる (春) (名) 6
 河風に一むら柳 春見えて
 くるかた見えぬ 山里の春
 きけはいまはの 春のかりかね
 は・る (晴る) (自ラ下二) 62
 は・るる (晴るる) (体)
 晴るゝまも 袖はしくれの 旅衣
 はる・あき (春秋) (名) 17
 山かつになと 春秋の しらるらん
 はるーかぜ (春風) (名) 75
 枯れし林も 春風そ吹く
 はるか (遙か) (形動ナリ) 96
 末野なる 里ははるかに 霧立ちて
 ひ
 ひ (目) (名) 29
 鶉なくかた山 かれて 寒き日に
 また残る日の うちかすむ影
 牙ゆる日も 身は袖うすき 暮ことに
 月日のすゑや 夢にめくらん
 ひと (人) (名) 42
 ゆく人かすむ 雨の暮れかた
 あたの大野を 心なる人
 人におしなへ 道は正しき
 猶なになれや 人の恋しき

36 100 92 78 42 31 14 69 29 96 75 17 62 45 3 6

かくす身を人はなきにもなしつらむ	85	枯れし林も春風ぞ吹く	96
おほろけの月かは人もまてしはし	27	ふ・く(更く)(自カ下二)	
婦りこは待ちし思を人やみむ	71	ふ・け(更け)(用)	
夕汐風の遠つ舟人	52	いたつらにあかす夜おほく秋更て	19
見しはみな故郷人の跡もなし	21	ふ・くる(更くる)(体)	
心あるかきりそしるき世捨人	59	雁なく山の月更くる空	90
ひと・だのめ(人頼め)(形動ナリ)	46	ふし・わ・ぶ(伏し侘ぶ)(自バ上二)	
身をあき風も人たのめなり	3	ふし・わ・び(伏し侘び)(用)	
ひとむら・やなぎ(叢柳)(名)	11	秋風のあら磯枕ふしわひぬ	89
河風に一むら柳春見えて		ふな・びと(舟人)(名)	
ひとり(一人・独)(名)		夕汐風の遠つ舟人	52
今更にひとりある身を思ふなよ		ふね(舟)(名)	
ふ		舟さす音もしるき明けかた	4
ふ(経)(自ハ下二)		おさまる浪に舟いつる見ゆ	60
へ(末)		この岸をもろこし舟のかきりにて	43
契りはや思ひたえつ、年も経ぬ	83	ふゆーがれ(冬枯れ)(名)	
ふか・し(深し)(形ク)		冬枯れの芦たつわひて立てる江に	51
ふか(深)(語幹)		ふるさとーびと(故郷人)(名)	
露ふかみ霜さへしほる秋の袖	67	見しはみな故郷人の跡もなし	21
ふか・き(深き)(体)		ふる・し(古き)(形ク)	
山ふかき里や嵐におくるらん	9	ふる・き(古き)(体)	
ふきーく(吹き来)(自カ変)		草木さへふるき都の恨にて	39
ふきーくる(吹き来る)(体)		べし(助動・終)	
吹きくる風は衣うつ声	30	いやしきも身ををさむるは有つへし	99
ふ・く(吹く)(自カ四・体)			

み (接尾)

露ふかみ 霜さへしほる 秋の袖

みち (道・路) (名)

垣根をとへは あらはなる路

昔よりたゝあやにくの 恋の道

木のした分る 道の露けさ

さりとももの この世の道は つきはてゝ

人におしなへ道は正しき

みづ (水) (名)

行く水遠く 梅にほふ里

みな (皆) (副)

見しはみな 故郷人の 跡もなし

みね (峯・嶺) (名)

峯の庵 木の葉の後も すみあかて

雲にけふ 花ちりはつる 嶺こえて

みやこ (都) (名)

草木さへ ふるき都の 恨にて

みーやま (深山) (名)

み山をゆけは 分く空もなし

み・ゆ (見ゆ) (自ヤ下二)

み・え (見え) (用)

誰か手枕に 夢は見えけん

くるかた見えぬ 山里の春

み・ゆ (見ゆ) (終)

おさまる浪に 舟いつる見ゆ

み・ゆる (見ゆる) (体)

煙のとかに見ゆる 仮庵

みる (見る) (他ラ四)

み (見) (未)

帰りは 待ちし思を 人やみむ

小萩原 うつろふ露も 猶やみん

み (見) (用)

見しはみな 故郷人の 跡もなし

む

む (助動)

ま (未)

うす花すゝき 散らまくも惜し

む (終)

うつろはむとは かねて知らすや

む (体)

宿りせん 野を鶯や 厭ふらむ

老のゆくへよ 何にかゝらむ

思へはいつを いにしへにせむ

ゆくへなき 霞やいつく はてならん

帰りは 待ちし思を 人やみむ

小萩原 うつろふ露も 猶やみん

月日のすゑや 夢にめくらん

わか草枕 月やつさむ

宿りせん 野を鶯や 厭ふらむ

むかし (昔) (名)

昔よりたゝあやにくの 恋の道

昔よりたゝあやにくの 恋の道

67

8

73

56

33

100

2

21

63

25

39

16

82

54

60

98

71

91

71

21

68

12

79

22

94

53

71

91

42

18

79

73

むし(虫)(名)

鳴く虫の心ともなく草かれて

松虫のなく音かひなき蓬生に

・むら(叢)(接尾)

河風に一むら柳春見えて

め

めぐ・る(巡る)(他ラ四)

めぐ・ら(巡ら)(末)

月日のすゑや夢にめぐらん

も

も(助詞)〔間投助・終助・係助ノ各用法ヲ含ム〕

身をあき風も人たのめなり

見しはみな故郷人の跡もなし

峯の庵木の葉の後もすみあかて

色もなきことの葉をたに哀しけれ

舟さす音もしるき明けかた

秋はなともらぬ岩屋も時雨るらん

野となる里も佗ひつゝそすむ

なれぬすまるそさひしさもうき

小夜もしつかに桜咲くかけ

み山をゆけは分く空もなし

それも友なる夕暮の空

小萩原うつつるふ露も猶やみん

契りはや思ひたえつゝ年も経ぬ

83 91 24 16 80 10 70 57 4 23 63 21 46 42 3 47 7

枯れし林も春風そ吹く

冴ゆる日も身は袖うすき暮ことに

おほろけの月かは人もまてしはし

暗るゝまも袖はしくれの旅衣

身のうき宿も名残りこそあれ

今はのよはひ山もたつねし

いやしきも身ををさむるは有つへし

うときも誰かこゝろなるへき

たのむもはかな爪木とる山

鳴く虫の心ともなく草かれて

小萩原うつつふをしも猶やみん(桂本)

かくす身を人はなきにもなしつらむ

うす花すゝき散らまくも惜し

さてもうき世にかゝる玉の緒

さりともこの世の道はつきはてゝ

君を置きてあかすも誰を思ふらん

もと(下・本)(名)

雪なから山もとかすむ夕かな

も・る(漏る)(自ラ四)

も・ら(漏ら)(末)

秋はなともらぬ岩屋も時雨るらん

もろこし・ぶね(唐舟)(名)

この岸を もろこし舟のかきりにて

や

や(屋)(名)

43 57 1 37 33 86 68 85 91 7 32 72 99 84 40 17 27 31 96

や (助詞) (間投助・終助・係助ノ各用法ヲ含ム)

宿りせん 野を鶯や 厭ふらむ

忘るなよ かきりやかはる 夢うつゝ

ゆくへなき 霞やいつくはてならん

山ふかき 里や嵐に おくるらん

月日のすゑや 夢にめくらん

月や 猶霧わたる夜に 残るらん

わか草枕 月や やつさむ

帰りこは 待ちし思を 人やみむ

小萩原 うつろふ露も 猶やみん

心細しや いつちゆかまし

うつろはむとは かねて知らずや

猶なになれや 人の恋しき

暮れぬとや 鳴きつつ鳥の 帰るらむ

月はしるやの 旅そかなしき

やつ・す (尙す) (他サ四)

やつ・さ (尙さ) (末)

わか草枕 月ややつさむ

やど (宿) (名)

身のうき宿も 名残りこそあれ

やどり (宿り) (名)

宿りせん 野を鶯や 厭ふらむ

やなぎ (柳) (名)

河風に 一むら柳 春見えて

やま (山) (名)

57

79

93

93

53

9

42

5

18

71

91

34

12

36

15

66

18

40

79

3

山ふかき 里や嵐に おくるらん

たのむもはかな 爪木とる山

雁なく山の 月更くる空

しめゆふ山は 月のみそすむ

山はけさ いく霜夜にか 霞むらん

今はのよはひ 山もたつねし

鶉なく かつ山くれて 寒き日に

雪にさやけき 四方の遠山

み山をゆけは 分く空もなし

やまゝがつ (山賤) (名)

山かつになと 春秋の しらるらん

やまゝざと (山里) (名)

くるかた見えぬ 山里の春

やまゝもと (山下・山本) (名)

雪ながら 山もとかすむ 夕かな

ゆ

ゆき (雪) (名)

雪ながら 山もとかすむ 夕かな

雪にさやけき 四方の遠山

ゆ・く (行く) (自カ四)

ゆ・か (行か) (末)

心細しや いつちゆかまし

ゆ・く (行く) (体)

行く水遠く 梅にほふ里

ゆく人かすむ 雨の暮れかた

9

32

90

48

97

84

69

62

16

75

54

1

1

2

78

34

1

62

2

78

- ゆ・け(行け)〔已〕
 み山をゆけは 分く空もなし 16
- ゆくゝへ(行方)〔名〕
 ゆくへなき 霞やいつくはてならん 53
 老のゆくへよ 何にかゝらむ 22
- ゆふ(夕)〔名〕
 松の葉をたゝ朝夕の煙にて 87
- ゆふ(結ふ)〔他ハ四・体〕
 しめゆふ山は 月のみそすむ 48
- ゆふゝぐれ(夕暮れ)〔名〕
 それも友なる 夕暮の空 24
- ゆふゝしほかせ(夕汐風)〔名〕
 夕汐風の 遠つ舟人 52
- ゆふゝべ(夕べ)〔名〕
 雪ながら 山もとかすむ 夕かな 1
- ゆめ(夢)〔名〕
 忘るなよ かきりやかはる 夢うつゝ
 夢にうらむる 萩の上風 93
 月日のすゑや 夢にめくらん 42
 誰か手枕に 夢は見えけん 82
- よ
 よ(世)〔名〕
 わすられかたき 世さへうらめし 74
 仏たち 隠れては 又いつる世に 95
 さりともの この世の道は つきはてゝ 33
- よ(夜)〔名〕
 さてもうき世にかゝる玉の緒 86
 いたつらに あかす夜おほく 秋更て 19
 月や 猶霧わたる夜に 残るらん 5
 山は けさいく 霜夜にか 霞むらん 97
 小夜も しつかに 桜咲くかけ 80
- よ(助詞)
 たらちねの 遠からぬ跡に なくさめよ 41
 今更に ひとりある身を 思ふなよ 11
 忘るなよ かきりやかはる 夢うつゝ 93
 老のゆくへよ 何にかゝらむ 22
- よすてゝびと(世捨人)〔名〕
 心ある かきりそしるき 世捨人 59
- よなゝよな(夜な夜な)〔名〕
 いたゝきけりな 夜なゝの 霜 50
- よはひ(齢)〔名〕
 今はよはひ 山もたつねし 84
- よゝも(四方)〔名〕
 雪にさやけき 四方の 遠山 62
- よもぎゝふ(蓬生)〔名〕
 松虫の なく音かひなき 蓬生に 47
- より(格助)
 茂みより たえゝのこる 花落ちて 55
 昔より たゝあやにくの 恋の道 73
- よる(夜)〔名〕
 朝なきの 空に跡なき 夜の雲 61

ら

らむ〔助動・終〕

かくす身を人はなきにもなしつらむ

らむ〔助動・体〕

宿りせん野を鶯や厭ふらむ

山ふかき里や嵐におくるらん

君を置きてあかすも誰を思ふらん

山はけさいく霜夜にか霞むらん

暮れぬとや鳴きつつ鳥の帰るらん

秋はなともらぬ岩屋も時雨るらん

山かつになと春秋のしらるらん

浦わの里はいかにすむらん

月や猶霧わたる夜に残るらん

り

り〔助動〕

る〔体〕

冬枯れの芦たつわひて立てる江に

る

る〔助動・終〕

山かつになと春秋のしらるらん

れ〔用〕

わすられかたき世さへうらめし

わ

わ・が〔我が・吾が〕〔代名〕

わか草枕 月ややつさむ

わか・る〔分る〕〔自ラ四・体〕

木のした分る道の露けさ

わ・く〔分く〕〔他カ四・体〕

み山をゆけは分く空もなし

わす・る〔忘る〕〔自ラ下二〕

わす・ら〔忘ら〕〔末〕

わすられかたき世さへうらめし

わす・る〔忘る〕〔終〕

忘るなよかきりやかはる夢うつゝ

わた・る〔渡る〕〔他ラ四・終〕

月や猶霧わたる夜に残るらん

わ・ぶ〔佗ぶ〕〔自バ上二〕

わ・び〔佗び〕〔用〕

野となる里も佗ひつゝそすむ

冬枯れの芦たつわひて立てる江に

秋風のあら磯枕ふしわひぬ

わ・ぶる〔佗ぶる〕〔体〕

置きわふる露こそ花にあはれなれ

われ〔我・吾〕〔代名〕

鐘にわれたゝあらましの寝覚して

74

75

51

5

88

75

57

15

97

37

9

79

85

49

13

89

51

70

5

93

74

16

56

18

を

を〔緒〕〔名〕

さてもうき世にかゝる玉の緒

を〔助詞〕

誰かこの暁おきをかさねまし

思へはいつをいにしへにせむ

あたの大野を心なる人

帰りこは待ちし思を人やみむ

垣根をとへはあらはなる路

この岸を もろこし舟のかきりにて

君を置きてあかすも誰を思ふらん

灯をそむくる花にあけそめて

宿りせん野を鶯や厭ふらむ

又生れこぬ法を聴かはや

今更にひとりある身を思ふなよ

身をあき風も人たのめなり

かくす身を人はなきにもなしつらむ

いやしきも身をささむるは有つへし

松の葉をたゝ朝夕の煙にて

み山をゆけは分く空もなし

〔を・しも〕

〔を・だに〕

小萩原 うつろふをしも 猶やみんへ類徒本

をぎ〔荻〕〔名〕

夢にうらむる荻の上風
をさま・る〔治まる〕〔自ラ四・体〕

おさまる浪に舟いつる見ゆ

をさ・む〔治む〕〔他マ下二〕

をさ・むる〔治むる〕〔体〕

いやしきも身をささむるは有つへし

を・し〔惜し〕〔形シク・終〕

うす花すゝき散らまくも 惜し

86 65 94 92 71 8 43 37 81 79 44 11 46 85 99 87 16 91 23

20 60 99 68

湯山三吟百韻

あ

あき(秋)〔名〕

うちつけの 秋にさひしく霧立て

露もはや置きわふる庭の 秋の暮

いつみを聞けはたゝ秋のこゑ

いてんも悲し秋の山てら

秋のよもかたる枕にあげやせん

あき・かぜ(秋風)〔名〕

さよ更けけりな袖の秋風

あつき日はかけよわる露の 秋風に

あき・の・よ(秋の夜)〔名〕

秋のよもかたる枕にあげやせん

あ・く(明く)〔自カ四〕

あ・け(明け)〔用〕

秋のよもかたる枕にあげやせん

あさ・つゆ(朝露)〔名〕

朝露もなほ長閑にてかすむ野に

あさと・で(朝戸出)〔名〕

袖さえてよるは時雨の 朝戸出に

あさま(浅間)〔名〕

あさ・ゆふ(朝夕)〔名〕

身をなさはやの朝ゆふの春

あしひき・の(足引の)〔枕詞〕

雪ふむ駒のあし引の山

あだ(徒)〔名〕

たかならぬあたのたのみを命にて

あぢき・な(形ク)

あぢき・な〔語幹〕

うちなかむるもあぢきな世や

あつ・し(暑し・熱し)〔形ク〕

あつ・き(暑き・熱き)〔体〕

あつき日はかけよわる露の 秋風に

あと(後)〔名〕

鹿の音をあとなる嶺の夕まくれ

さこそは花をあと山こえ

あと(跡)〔名〕

名も知らぬ草木のもとに跡しめて

夢はあとなき野辺の露けさ

あはれ(哀)〔名〕

あはれは月になほそそひ行く

あはれ・さ(哀さ)〔名〕

野分せし日の霧のあはれさ

あま(天)〔名〕

あま・つ(天つ)〔連体〕

思ひ立つ雲路にかすむ天つかり

をちこちに成りて浅間の夕煙

63

39

17

17

87

4

17

30

24

55

69

75

10

62

19

40

87

96

15

72

16

32

95

あまーの (天の) (連体)	
今朝や身にしむ 天の川風	
あやーにく (形動ナリ)	
あやにくなれや 思たえはや	
あらーいそ (荒磯) (名)	
夕の波の あら磯のこゑ	
あらし (嵐) (名)	
ならばしほれ あらしもそうき	
あらーまほ・し (有らまほし) (形シク)	
あらーまほ・しけれ (有らまほしけれ) (已)	
世にこそ道は あらまほしけれ	
あ・り (有り・在り) (自ラ変)	
あ・ら (有り・在り) (末)	
世にこそ道は あらまほしけれ	
あ・り (有り・在ら) (用)	
ありぬやと 心みにすむ 山里に	
あ・る (有る・在る) (体)	
うときは何かゆかしけもある	
あ・れ (有れ・在れ) (已)	
たのむこと あれは猶うき 世間に	
い	
いさよ・ふ (自ハ四・体)	
一村雨に 月そいさよふ	
いさりーび (漁火) (名)	
いさり火を見るもすさまじ 沖つ舟	

43 100 59 92 47 12 12 48 44 58 70

いそ (磯) (名)	
夕の波の あら磯のこゑ	
いそーがく・る (磯隠る) (自ラ四)	
いそーがく・れ (磯隠れ) (用)	
和歌の浦や 磯かくれつゝ 迷ふ身に	
い・づ (出づ) (自ダ下二)	
い・で (出で) (末)	
出はかりなる やとりともなし	
いてんも悲し 秋の山てら	
い・で (出で) (用)	
松虫に さそはれ初めし 宿いて、	
いつーか (何時か) (副)	
いつか心の 松もしられし	
いつーしーか (何時しか) (副)	
いつしか人になれつゝも 見む	
いづみ (泉) (名)	
いづみを聞けは たゝ 秋のこゑ	
いと・ふ (厭ふ) (他ハ四・体)	
今よりいとふ なかきよの 闇	
いにーしーへ (古) (名)	
ふるき都の いにしへの 道	
いのち (命) (名)	
たかならぬ あたのたのみを 命にて	
いはもとーすき (岩本薄) (名)	
岩もとすゝき 冬やなほみん	
い・ふ (言ふ) (他ハ四)	

2 19 36 42 24 74 50 3 30 98 41 44

い・へ (言へ) (已)

さくらといへは 山風ぞ吹く

いほ (庵) (名)

憑めなほ契りし人を 草の庵

はかなしや にしを心の 柴の庵

いま (今) (名)

すみはなれ 今はほとさへ 雲るちに

今よりいとふ なかきよの 闇

い・む (忌む) (他マ四)

い・み (忌み) (用)

更くるまで 身のうき月を 忌かねて

いらか (憂) (名)

いらかの上の 月のさむけさ

い・る (入る) (自ラ四)

い・り (入り) (用)

入りにし山よ 何かさひしき

いろ (色) (名)

色かはる 山のしら雲 打なひき

うす雪に 木葉色こき 山路かな

わきてその 色やは見ゆる 松の風

う

うぐひす (鶯) (名)

み山にのこる うくひすの 声

う・し (憂し) (形ク)

う・し (憂し) (終)

行きて心を みたさんも憂し

う・き (憂き) (体)

ならば、しほれ あらしもそうき

さそふつてまつ 佗人そうき

更くるまで 身のうき月を 忌かねて

露のまもうき 古里と思ふなよ

たのむこと あれは猶うき 世間に

うきはた、鳥をうらやむ 花なれや

うす・し (薄し) (形シク・終)

衣手うすし ひくらしの 声

うす・ゆき (薄雪) (名)

うす雪に 木葉色こき 山路かな

うち・ (打ち) (接頭)

うちなかむるも あちきなの 世や

色かはる 山のしら雲 打なひき

ふる人めきて うちそしはふく

うち・つけ (打ち付け) (形動ナリ)

うちつけの 秋にさひしく 霧立て

う・つ (打つ) (他タ四)

う・ち (打ち) (用) (接頭)

うちなかむるも あちきなの 世や

色かはる 山のしら雲 打なひき

ふる人めきて うちそしはふく

う・つ (打つ) (体)

衣うつ 宿をかりふし おきわかれ

34

48

20

41

99

59

9

88

1

40

89

84

69

40

89

84

40

89

89

84

71

40

89

84

71

	うと・き (疎き) (体)				
	うときは何の ゆかしけもある				
	うへ (上) (名)				
	いらかの上の 月のさむけさ				
	うら (浦) (名)				
	和歌の浦や 磯かくれつゝ 迷ふ身に				
	うらみゝがた・し (怨み難し) (形ク・終)				
	うらみかたしよ 松風の声				
	うら・む (怨む・恨む) (他マ上二)				
	うら・み (怨み・恨み) (末)				
	何をかは 昔のたもとに 恨みまし				
	うら・み (怨み・恨み) (用)				
	うみかたしよ 松風の声				
	うら・む (怨む・恨む) (終)				
	露のまもうき 古里と思ふなよ				
	うらや・む (羨む) (他マ四・体)				
	うきはたゝ 鳥をうらやむ 花なれや				
	え				
	え (副)				
	えーやーは (連語)				
	春そ行く 心もえやは とめさらん				
	お				
	おき (沖) (名)				
	いさり火を 見るもすさまし 沖つ舟				
43		67	9	99	64
					13
					64
					51
					82
					97
	おきゝわかれ (起き別れ) (名)				
	衣うつ 宿をかりふし おきわかれ				
	おきゝわ・ぶ (置き佗ぶ) (自バ上二)				
	おきゝわ・ぶる (置き佗ぶる) (体)				
	露もはや 置きわふる庭の 秋の暮				
	お・く (起く) (他カ四)				
	お・き (起き) (用)				
	衣うつ 宿をかりふし おきわかれ				
	おと (音) (名)				
	たれとなく かねに音して 深る夜に				
	おほ・し (多し) (形ク)				
	おほ・く (多く) (用)				
	藤衣 なこり多くも 今日ぬきて				
	おもひ (思ひ) (名)				
	思の露を かけし 悔しき				
	おもひ・ぐさ (思ひ草) (名)				
	つれなしや 野は霜かれの 思卿				
	おもひ・た・つ (思ひ立つ) (他夕四・体)				
	思ひ立つ 雲路にかすむ 天つかり				
	おもひ・た・ゆ (思ひ絶ゆ) (他ヤ下二)				
	おもひ・た・え (思ひ絶え) (末)				
	あやにくなれや 思たえはや				
	おもひ・な・る (思ひ馴る) (自ラ下二)				
	おもひ・な・れ (思ひ馴れ) (末)				
	思ひもなれぬ 野への行すゑ				
	おも・ふ (思ふ) (他ハ四)				
6		58	95	49	18
					29
					83
					71
					55
					71

おも・は(思は)(末)

咲く花も おもはさらめや 春の夢

おも・ひ(思ひ)(用)

身のふりぬまは 何おもひけん

あやにくなれや 思たえはや

思ひ立つ 雲路にかすむ 天つかり

おも・ふ(思ふ)(終)

露のまもうき 古里と思ふなよ

おも・ふ(思ふ)(体)

もの思ふ玉や ねんかたもなき

おも・へ(思へ)(已)

花をのみ思へはかすむ 月のもと

お・ゆ(老ゆ)(自や上二)

お・い(老い)(用)

おいてや人は 身をやすくせん

か

か(係助)

入りにし山よ 何かさひしき

いつか心の 松もしられし

いつしか人になれつゝも 見む

何をかは 昔のたもとに 恨みまし

が(格助)

たかならぬ あたのたのみを 命にて

枕さへしるとは するな 我心

か・く(掛く・懸く)(他カ下二)

か・け(掛け・懸け)(用)

思の露を かけし 悔しき

かく・る(隠る)(自ラ下二)

かく・れ(隠れ)(用)

和歌の浦や 磯かくれつゝ 迷ふ身に

かげ(影)(名)

かけ白き 月を 枕の むらすゝき

あつき日は かけよわる 露の 秋風に

かこ・つ(託つ)(他夕四・終)

蓬生や とふをたよりに 啣つらん

かす・む(籠む)(自マ四・体)

思ひ立つ 雲路にかすむ 天つかり

花をのみ 思へはかすむ 月のもと

朝露も なほ長閑にて かすむ野に

かぜ(風)(名)

わきてその 色やは見ゆる 松の風

さよ更けけりな 袖の秋風

今朝や身にしむ 天の川風

うらみかたしよ 松風の声

さくらといへは 山風ぞ吹く

かた(方)(名)

もの思ふ玉や ねんかたもなき

かた・し(難し)(形ク・終)

うらみかたしよ 松風の声
かたやれゝをぶね(片破れ小舟)(名)

37

78

58

95

6

99

26

65

60

22

50

74

13

19

27

18

51

73

87

85

95

65

39

70

64

38

26

64

	思の露を かけし悔しさ	18		くちーや・る (朽ち遣る) (目ラ四)
	松虫に さそはれ初めし 宿いて、	3		くちーや・ら (朽み遣ら) (末)
	心をも そめにし物を 世捨人	97		捨てらるゝ 片破れ小舟 朽ちやらて
	恐めなほ 契りし人を 草の庵	91		く・つ (朽つ) (目タ上二)
	野分せし日の 霧のあはれさ	32		く・ち (朽ち) (用)
	き・く (聞く) (他カ四)			捨てらるゝ 片破れ小舟 朽ちやらて
	き・け (聞け) (已)			くも (雲) (名)
	いつみを聞けは たゞ秋のこゑ	24		雲をしるへの みねのはるけさ
	き・ゆ (消ゆ) (自ヤ下二)			きゆとも雲を それとしらめや
	き・ゆ (消ゆ) (終)			色かはる 山のしら雲 打なひき
	きゆとも雲を それとしらめや	76		くもーぢ (雲路) (名)
	き・ゆる (消ゆる) (体)			思ひ立つ 雲路にかすむ 天つかり
	ふる里も 残らすきゆる 雪をみて	11		くもぬーち (雲居路) (名)
	きり (霧) (名)			すみはなれ 今はほとさへ 雲あちに
	うちつけの 秋にさひしく 霧立て	69		くやしーさ (悔しさ) (名)
	野分せし日の 霧のあはれさ	32		思の露を かけし悔しさ
	く			くる・し (苦し) (形シク)
	く (来) (自カ変)			くる・しき (苦しき) (体)
	くる (来る) (体)			こえしとの 法もくるしき 道にして
	みちくる沙や 人したふらん	52		くれ (暮) (名)
	くさ (草) (名)			露もはや 置きわふる庭の 秋の暮
	恐めなほ 契りし人を 草の庵、	91		け
	つれなしや 野は霜かれの 思脚	49		げ (気) (接尾)
	くさーき (草木) (名)			うときは何の ゆかしけもある
	名も知らぬ 草木のもとに 跡しめて	15		けーさ (今朝) (名)

今朝イロや身にしむ 天の川風
けふイロ(今日)(名)

藤衣イロなこり多くも 今日ぬきて
今日イロや身にしむ 天の川風

けぶり(煙)(名)

をちこちに成りて浅間の夕煙

けむ(助動・体)

身のふりぬまは何おもひけん

けり(助動・終)

尾上の松も 心みせけり

さよ更けけりな 袖の秋風

二

こ(此)(代名)

この頃しけさまさる道芝

こ(こ)え(越え)(接尾)

さこそは花を あとの山こえ

こけ(苔)(名)

何をかは苔のたもとに 恨みまし

こころ(心)(名)

枕さへしるとはしるな 我心

尾上の松も 心みせけり

いつか心の 松もしられし

はかなしやにしを心の 柴の庵

ねぬ夜半の 心も知らす 月すみて

春そ行く 心もえやはとめさらん

67 57 77 50 90 27 13 96 86 4 90 78 75 70 29 70

行きて心をみたさんも愛し
心をもそめにし物を 世捨人

こころみ(試み)(名)

ありぬやと 心みにすむ 山里に

こ(こ)し(濃し)(形ク)

こ(こ)き(濃き)(体)

うす雪に 木葉色こき 山路かな

こそ(係助)

世にこそ道は あらまほしけれ

さこそは花を あとの山こえ

こ(こ)ち(此方)(代名)

をちこちに 成りて浅間の夕煙

こと(事)(名)

たのむこと あれば猶うき 世間に

こ(こ)の(此の)(連語)

この頃しけさまさる道芝

このした(もみち) 木の下の紅葉(名)

木の下もみち 尋ぬるもなし

こ(こ)の(こ)は(木の葉)(名)

うす雪に 木葉色こき 山路かな

こ(こ)ほ(凍る)る(自ラ四・体)

冬の林に 水こほるこえ

こ(こ)ま(駒)(名)

雪ふむ駒の あし引の山

こ(こ)ゆ(越ゆ)(自ヤ下二)

こ(こ)え(越え)(未)

62 80 1 54 86 59 75 96 12 1 47 97 34

こえしとの法もくるしき道にして

ころ(頃)(名)

この頃しけさまさる道芝

虫の音細し霜をまつ頃

藤咲く頃のたそかれの空

ころも(衣)(名)

衣うつ宿をかりふしおきわかれ

藤衣なこり多くも今日ぬきて

ころも(で)(衣手)(名)

衣手うすしひくらしの声

こゑ(声)(名)

いつもを聞けばたゞ秋のこゑ

夕の波のあら磯のこゑ

み山にのこるうくひすの声

衣手うすしひくらしの声

冬の林に水こぼるこゑ

うらみかたしよ松風の声

さ

さ(然)(副)

さーこぞーは(然こそは)(連語)

さこぞは花をあと山こえ

ーさ(接尾)

野分せし日の霧のあはれさ

思の露をかけし悔しさ

いらかの上の月のさむけさ

この頃しけさまさる道芝

夢はあとなき野辺の露けさ

雲をしるへのみねのはるけさ

さ・く(咲く)(自力四・体)

咲く花もおもはさらめや春の夢

藤咲く頃のたそかれの空

さくら(桜)(名)

さくらといへは山風そ吹く

さそ・ふ(誘ふ)(他ハ四)

さそ・は(誘は)(未)

松虫にさそはれ初めし宿いて、

さそ・ふ(誘ふ)(体)

さそふつてまつ佗人そうき

さと(里)(名)

静なる鐘に月まつ里みえて

ふる里も残らすきゆる雪をみて

ありぬやと心みにすむ山里に

さび・し(寂し)(形シク)

さび・しく(寂しく)(用)

うちつけの秋にさひしく霧立て

入りにし山よ何かさひしき

さへ(副助)

すみはなれ今はほとさへ雲あちに

枕さへしるとはしるな我心

さむけ・さ(寒けさ)(名)

82	18	32	96		64	80	88	68	44	24	88	29	71	56	56	86	61
27	21	22	69	47	11	33	20	3	38	66	37	8	72	86			

	いらかの上の月のさむけさ			
	さむ・し(寒し)(形ク)			
	さむ・し(寒し)(終)			
	露さむし月も光やかはるらん	5		
	さむ・き(寒き)(体)			
	かけ寒 ^イ き月を枕のむらすき	73		
	さ・ゆ(冴ゆ)(自ヤ下二)			
	さ・え(冴え)(用)			
	袖さえてよるは時雨の朝戸出に	63		
	さ・よ(小夜)(名)			
	さよ更けけりな袖の秋風	4		
	し			
	じ(助動・終)			
	こえしとの法もくるしき道にして	61		
	しか(鹿)(名)			
	鹿の音をあとなる嶺の夕まくれ	31		
	し・か(運助)			
	いつしか人になれつゝも見む	74		
	しぐれ(時雨)(名)			
	袖さえてよるは時雨の朝戸出に	63		
	しげ・さ(繁さ)(名)			
	この頃しげさまさる道芝	86		
	した(下)(名)			
	木の下もみち尋ぬるもなし	54		
	した・ふ(暮ふ)(他ハ四・終)			
	みちくる汐や人したふらん	52		
	しづか(静か)(形動ナリ)			
	静なる 鐘に月まつ里みえて	33		
	し・て(接助)			
	こえしとの法もくるしき道にして	61		
	しの・ぶ(忍ぶ)(他ハ四・終)			
	我なれて通ふや人もしのふらん	35		
	しば(柴)(名)			
	しば・の・いほ(柴の庵)(連語)			
	はかなしやにしを心の柴の庵	77		
	しば(芝)(名)			
	この頃しげさまさる道芝	86		
	しは・ぶ・く(咳く)(自カ四・体)			
	ふる人めきてうちそしはふく	84		
	しほ(潮)(名)			
	みちくる汐や人したふらん	52		
	し・む(染む)(自マ四・体)			
	今朝や身にしむ天の川風	70		
	し・む(占む)(他マ下二)			
	し・め(占め)(用)			
	名も知らぬ草木のもとに跡しめて	15		
	しも(霜)(名)			
	虫の音細し霜をまつ頃	56		
	しも・がれ(霜枯れ)(名)			
	つれなしや野は霜かれの思艸	49		
	しら・くも(白雲)(名)			

色かはる 山のしら雲 打なひき

し・る (知る) (他ラ四)

し・ら (知ら) (未)

ねぬ夜半の 心も知らず 月すみて
名も知らぬ 草木のもとに 跡しめて

きゆとも雲を それとしらめや

いつか心の 松もしられし

し・る (知る) (終)

枕さへしるとはしるな 我か心

枕さへしるとはしるな 我か心

しる・べ (知る辺) (名)

雲をしるへの みねのはるけさ

しろ・し (白し) (形ク)

しろ・き (白き) (体)

かけ白き 月を枕の むらすゝき

しを・る (萎る) (自ラ下二)

しを・れ (萎れ) (命)

ならばゝしほれ あらしもそうき

す

す (為) (他サ変)

せ (為) (未)

野分せし日の 霧のあはれさ

秋のよも かたる枕に あげやせん

涙をたにも なくさめにせん

おいてや人は 身をやすくせん

89

し (為) (用)

たれとなく かねに音して 深る夜に

螢飛ふ 空によふかく 端居して

ず (助動)

ざら (未)

咲く花も おもはさらめや 春の夢

春そ行く 心もえやは とめさらん

ず (用)

ねぬ夜半の 心も知らず 月すみて

ふる里も 残らすきゆる 雪をみて

我なうて 通ふや人も しのふらん

ぬ (体)

思ひもなれぬ 野への行すゑ

たかならぬ あたのたのみを 命にて

名も知らぬ 草木のもとに 跡しめて

ねぬ夜半の 心も知らず 月すみて

身のふりぬまは 何おもひけん

す・ぐ (過ぐ) (自カ上二・終)

誰れ呼子鳥 啼きて過くらむ

すさび (荒び・遊び) (名)

みるめにも みゝにもすさひ 遠さかり

すさまし (形シク・終)

いさり火を見るもすさまし 沖つ舟

すすき (薄) (名)

岩もとすすき 冬やなほみん

かけ白き 月を枕の むらすゝき

83

25

37

67

57

35

6

19

15

57

78

94

73

2

43

79

94

78

57

15

19

6

35

11

57

67

37

25

83

す・つ (捨つ) (他タ下二)					
す・て (捨て) (未)					
捨てらるゝ片破れ小舟朽ちやらて					
すみ・はな・る (住み離る) (自ラ下二)					
すみ・はな・れ (住み離れ) (用)					
すみはなれ今はほとさへ雲るちに					
す・む (住む) (自マ四)					
す・み (住) (用)					
すみはなれ今はほとさへ雲るちに					
す・む (住む) (体)					
ありぬやと心みにすむ山里に					
す・め (住め) (已)					
すめは山かつ人もたつぬな					
す・む (澄む) (自ヤ四)					
す・み (澄み) (用)					
ねぬ夜半の心も知らす月すみて					
すゑ (未) (名)					
思ひもなれぬ野への行すゑ					
せ					
せき (関) (名)					
わりなしや 勿来関の前わたり					
そ					
そ (其) (代名)					
わきてその色やは見ゆる松の風					
そ (係助)					
一村雨に月そいさよふ					
春そ行く心もえやはとめさらん					
さくらといへは山風そ吹く					
さそふつてまつ 佗人そうき					
あはれは月になほそそひ行く					
ふる人めきてうちそしはふく					
ならばしほれあらしもそうき					
そで (袖) (名)					
袖さえてよるは時雨の朝戸出に					
さよ更けけりな袖の秋風					
そーの (其) (連語)					
わきてその色やは見ゆる松の風					
そひ・ゆ・く (添ひ行く) (自カ四・体)					
あはれは月になほそそひ行く					
そ・ふ (添ふ) (自ハ四)					
そ・ひ (添ひ) (用) ↓そひ・ゆ・く (前項)					
そ・む (染む) (他マ下二)					
そ・め (染め) (用)					
心をもそめにし物を世捨人					
そ・む (初む) (他マ下二)					
そ・め (初め) (用)					
松虫にさそはれ初めし宿いて、					
そら (空) (名)					
藤咲く頃のたそかれの空					
かたらふもはかなの友や旅の空					

螢飛ぶ空によふかく端居して
それ(其)〔代名〕

25

きゆとも雲を それとしらめや

郭公なのりそれとも 誰分かむ

76 45

た

た(誰)〔代名〕

たかならぬ あたのたのみを 命にて

19

たそゝかれ(黄昏)〔名〕

藤咲く頃の たそかれの空

66

ただ(唯・只)〔副〕

うきはたゝ 鳥をうらやむ 花なれや

9

いつみを聞けは たゝ秋のこゑ

24

た・つ(立つ)〔自タ四〕

た・ち(立ち)〔用〕

うちつけの 秋にさひしく 霧立て

69

た・つ(立つ)〔体〕

思ひ立つ 雲路にかすむ 天つかり

95

たづ・ぬ(尋ぬ)〔他ナ下二〕

たづ・ぬ(尋ぬ)〔終〕

すめは山かつ 人もたつぬな

14

たづ・ぬる(尋ぬる)〔体〕

すめは山かつ 人もたつぬな

14

木の下もみち 尋ぬるもなし

だに〔副助〕

だにーも(運助)

54

涙をたにも なくさめにせん

28

たのみ(頼み)〔名〕

たかならぬ あたのたのみを 命にて

19

たの・む(頼む)〔他マ四〕

たの・む(頼む)〔体〕

たのむこと あれば猶うき 世間に

59

たの・め(頼め)〔命〕

憑めなほ 契りし人を 草の庵

91

たび(旅)〔名〕

かたらふも はかなの友や 旅の空

7

たま(玉)〔名〕

もの思ふ玉や ねんかたもなき

26

たもと(袂)〔名〕

何をかは 昔のたもとに 恨みまし

13

た・ゆ(絶ゆ)〔自ヤ下二〕

た・え(絶え)〔末〕

あやにくなれや 思たえはや

58

たより(便)〔名〕

蓬生や とふをたよりに 啣つらん

85

たれ(誰)〔代名〕

郭公なのり それとも 誰分かむ

45

誰れ呼子鳥 啼きて過くらむ

94

たれとなく かねに音して 深る夜に

83

ち

いち(路)(接尾)

思ひ立つ 雲路にかすむ 天つかり

すみはなれ 今はほとさへ 雲ぬちに

ちぎ・る(契る)(他う四)

ちぎ・り(契り)(用)

懇めなほ 契りし人を 草の庵

つ

つ(格助)

思ひ立つ 雲路にかすむ 天つかり

いさり火を 見るもすさまじ 沖つ舟

つき(月)(名)

ねぬ夜半の 心も知らず 月すみて

静なる 鐘に月まつ 里みえて

一村雨に 月そいさよふ

いらかの上の 月のさむけさ

花をのみ 思へはかすむ 月のもと

露さむし 月も光や かはるらん

更くるまで 身のうき月を 忘かねて

かけ白き 月を枕の むらすき

いつけ(付)(接尾)

うちつけの 秋にさひしく 霧立て

つつ(接助)

和歌の浦や 磯かくれつゝ 迷ふ身に

いつしか人になれつゝも 見む
つて(伝)(名)

さそふつてまつ 佗人そうき

つゆ(露)(名)

露さむし 月も光や かはるらん

あつき日は かけよわる 露の秋風に

露のまもうき 古里と思ふなよ

露もはや 置きわふる 庭の秋の暮

思の露を かけし 悔しき

朝露も なほ長閑にて かつむ野に

つゆけーさ(露けさ)(名)

夢はあとなき 野辺の露けさ

つゆーのーま(露の間)(名)

露のまもうき 古里と思ふなよ

つれーな・し(形ク・終)

つれなしや 野は霜かれの 思艸

て

て(手)(名)

衣手うすし ひくらしの 声

て(接助)

松虫に さそはれ初めし 宿いて、

更くるまで 身のうき月を 忘かねて

たれとなく かねに音して 深る夜に

袖さえて よるは時雨の 朝戸出に

名も知らぬ 草木のもとに 跡しめて

51

69

73

41

5

65

82

100

33

57

43

95

91

21

95

15

63

83

41

3

88

49

99

72

39

18

55

99

87

5

20

74

ねぬ夜半の心も知らず 月すみて
 うちつけの 秋にさひしく 霧立て
 誰れ呼子鳥 啼きて過くらむ
 をちこちに 成りて 浅間の 夕煙
 藤衣 なこり多くも 今日ぬきて
 螢飛ふ 空によふかく 端居して
 夕からす ねにゆく山は 雪晴れて
 ふる人めきて うちそしはふく
 ふる里も 残らすきゆる 雪をみて
 静なる 鐘に月まつ 里みえて
 行きて心を みたさんも憂し
 わきてその 色やは見ゆる 松の風
 (にーて)
 朝露も なほ長閑にて かすむ野に
 (にーして)
 たかならぬ あたのたのみを 命にて
 こえしとの 法もくるしき 道にして
 (てーや)
 おいてや人は 身をやすくせん
 ーで (出) (接尾)
 袖さえて よるは時雨の 朝戸出に
 で (接助)
 捨てらるゝ 片破れ小舟 朽ちやらて
 我ならて 通ふや人も しのふらん
 てら (寺) (名)
 いてんも悲し 秋の山てら

30 35 53 63 60 61 19 39 23 34 33 11 84 81 25 29 75 94 69 57

と

と (格助)

さくらといへは 山風そ吹く
 露のまもうき 古里と思ふなよ
 きゆとも雲を それとしらめや
 ありぬやと 心みにすむ 山里に
 たれとなく かねに音して 深る夜に
 (とーの)
 こえしとの 法もくるしき 道にして
 (とーは)
 枕さへ しるとはしるな 我心
 (とーも)
 郭公なのりそれとも 誰分かむ
 出はかりなる やとりともなし
 きゆとも雲を それとしらめや
 と・ふ (問ふ・訪ふ) (他ハ四・体)
 蓬生や とぶをたよりに 啣つらん
 と・ぶ (飛ぶ) (自バ四・体)
 螢飛ふ 空によふかく 端居して
 とほーざか・る (遠ざかる) (自ラ四)
 とほーざか・り (遠ざかり) (用)
 みるめにも みゝにもすさひ 遠ざかり
 と・む (止む) (他マ下二)
 と・め (止め) (末)
 春そ行く心もえやは とめさらん

67 79 25 85 76 98 45 27 61 83 47 76 99 38

とも (友) (名)
 かたらふも はかなの友や 旅の空
 とも (接助) (→とーも)
 きゆとも雲を それとしらめや
 とり (鳥) (名)
 うきはたゝ 鳥をうらむや 花なれや
 誰れ呼子鳥 啼きて過くらむ
 な
 な (名)
 名も知らぬ 草木のもとに 跡しめて
 な (終助) (感動)
 さよ更けけりな 袖の秋風
 な (終助) (禁止)
 露のまもうき 古里と思ふなよ
 枕さへしるとはしるな 我か心
 すめは山かつ 人もたつぬな
 かへらん旅を 人よ忘るな
 なか (中) (名) (世の中)
 たのむこと あれは猶うき 世間に
 なが・し (長し) (形ク)
 なが・き (長き) (体)
 今よりいとふ なかきよの聞
 なが・む (詠む) (他マ下二)
 なが・むる (詠むる) (体)
 うちななむるも あちきなの世や

40 42 59 46 14 27 99 4 15 94 9 76 7

な・く (鳴く・啼く) (自力四)
 な・き (鳴き・啼き) (用)
 誰れ呼子鳥 啼きて過くらむ
 なぐさめ (慰め) (名)
 涙をたにも なくさめにせん
 なこそ、の、せき (勿来関) (名)
 わりなしや 勿来関の前わたり
 なこり (名残り) (名)
 藤衣なこり多くも 今日ぬきて
 な・し (無し) (形ク)
 な・く (無く) (用)
 たれとなく かねに音して 深る夜に
 な・し (無し) (終)
 木の下もみち 尋ぬるもなし
 出はかりなる やとりともなし
 な・き (無き) (体)
 夢はあとなく 野辺の露けさ
 もの思ふ玉や ねんかたもなき
 な・す (為す・成す) (他サ四)
 な・さ (為さ・成さ) (末)
 身をなさはやの 朝ゆふの春
 なに (何) (副)
 身のふりぬまは 何おもひけん
 入りにし山よ 何かさひしき
 うときは何の ゆかしけもある
 何をかは 昔のたもとに 恨みまし

13 92 22 78 10 26 72 98 54 83 29 93 28 94

なりのり (名告り) (名)

郭公 なのりそれとも 誰分かむ

45

なび・く (靡く) (自力四)

なび・き (靡き) (用)

色かはる 山のしら雲 打なひき

89

なほ (猶) (副)

岩もとすゝき 冬やなほみん

2

朝露も なほ長閑にて かすむ野に

39

たのむこと あれは猶うき 世間に

59

憑めなほ 契りし人を 草の庵

91

あはれは月になほそそひ行く

16

なみ (波・浪) (名)

夕の波の あら磯のこゑ

44

なみだ (涙) (名)

涙をたにも なくさめにせん

28

なら・ふ (慣ふ) (自ハ四)

なら・は (慣は) (末)

ならはゝしほれ あらしもそうき

48

な・り (助動)

な・ら (末)

たかならぬ あたのたのみを 命にて

19

我なうて 通ふや人も しのふらん

35

に (用) (形動語尾ヲ含ム)

たかならぬ あたのたのみを 命にて

19

朝露も なほ長閑にて かすむ野に

39

な・る (体) (形動語尾ヲ含ム)

鹿の音をあとなる嶺の夕まくれ

出はかりなる やとりともなし

静なる 鐘に月まつ 里みえて

な・れ (已)

あやにくなれや 思たえはや

うきはたゝ 鳥をうらやむ 花なれや

な・る (成る) (自ラ四)

な・り (成り) (用)

をちこちに 成りて浅間の夕煙

な・る (慣る) (自ラ下二)

な・れ (慣れ) (末)

思ひもなれぬ 野への行すゑ

な・れ (慣れ) (用)

いつしか人になれつゝも見む

に

に (格助)

名も知らぬ 草木のもとに 跡しめて

何をかは 苔のたもとに 恨みまし

たれとなく かねに音して 深る夜に

思ひ立つ 雲路にかすむ 天つかり

蓬生や とふをたよりに 啣つらん

松虫に さそはれ初めし 宿いてゝ

今朝や身にしむ 天の川風

あはれは月になほそそひ行く

静なる 鐘に月まつ 里みえて

31

98

38

58

9

75

6

74

15

13

83

95

85

3

70

16

33

いつしか人になれつゝも見む
み山にのこる うくひすの声

冬の林に水こぼるこゑ

あつき日はかけよわる露の秋風に

袖さえてよるは時雨の朝戸出に

朝露もなほ長閑にて かすむ野に

すみはなれ今はほときへ雲あちに

たれとなくかねに音して深る夜に

和歌の浦や磯かくれつゝ迷ふ身に

ありぬやと心みにすむ山里に

たのむことあれは猶うき世間に

秋のよもかたる枕にあげやせん

一村雨に月そいさよふ

うちつけの秋にさひしく霧立て

うす雪に木葉色こき山路かな

涙をたにもなくさめにせん

夕からすねにゆく山は雪晴れて

をちこちに成りて浅間の夕煙

ありぬやと心みにすむ山里に

世にこそ道はあらまほしけれ

〔に―して〕

こえしとの法もくるしき道にして

〔に―も〕

みるめにもみゝにもすすさひ遠さかり

みるめにもみゝにもすすさひ遠さかり

79 79 61 12 47 75 81 28 1 69 100 17 59 47 51 83 21 39 63 87 80 68 74

にし(西)(名)〔西方浄土〕

はかなしやにしを心の柴の庵

には(庭)(名)

露もはや置きわふる庭の秋の暮

ぬ

ぬ(寝)(自ナ下二)

ぬ(寝)(未)

ねぬ夜半の心も知らす月すみて

もの思ふ玉やねんかたもなき

ぬ(助動)

に(用)

入りにし山よ何かさひしき

心をもそめにし物を世捨人

ぬ(終)

ありぬやと心みにすむ山里に

ぬ・ぐ(脱ぐ)(他カ四)

ぬ・ぎ(脱ぎ)(用)

藤衣なこり多くも今日ぬきて

ね

ね(音)(名)

虫の音細し霜をまつ頃

鹿の音をあとなる嶺の夕まくれ

ね(寝)(名)

夕からすねにゆく山は雪晴れて

81 31 56 29 47 97 22 26 57 55 77

の

の(野)(名)

朝露もなほ長閑にてかすむ野に
つれなしや野は霜かれの思艸

の(格助)

うちつけの秋にさひしく霧立て

さよ更けけりな袖の秋風

あつき日はかけよわる露の秋風に

露もはや置きわふる庭の秋の暮

夕の波のあら磯のこゑ

ふるき都のいにしへの道

憑めなほ契りし人を草の庵

はかなしやにしを心の柴の庵

いらかの上の月のさむけさ

つれなしや野は霜かれの思艸

わきてその色やは見ゆる松の風

今朝や身にしむ天の川風

野分せし日の霧のあはれさ

露もはや置きわふる庭の秋の暮

ねぬ夜半の心も知らす月すみて

いつみを聞けはた秋のこゑ

夕の波のあら磯のこゑ

み山にのこるうくひすの声

衣手うすしひくらしの声
うらみかたしよ松風の声

64 88 68 44 24 57 55 32 70 23 49 82 77 91 36 44 55 87 4 69 49 39

色かはる山のしら雲打なひき

藤咲く頃のたそかれの空

かたらふもはかなの友や旅の空

藤咲く頃のたそかれの空

何をかは苔のたもとに恨みまし

たかならぬあたたのたのみを命にて

いらかの上の月のさむけさ

思の露をかけし悔しさ

夕の波のあら磯のこゑ

鹿の音をあとなる嶺の夕まくれ

虫の音細し霜をまつ頃

冬の林に水こぼるこゑ

身をなさはやの朝ゆふの春

露のまもうき古里と思ふなよ

尾上の松も心みせけり

わりなしや勿来関の前わたり

ふるき都のいにしへの道

雲をしるへのみねのはるけさ

かけ白き月を枕のむらすき

花をのみ思へはかすむ月のもと

名も知らぬ草木のもとに跡しめて

雪ふむ駒のあし引の山

さこそは花をあと山こゑ

いてんも悲し秋の山てら

今よりいとふななきよの闇
思ひもなれぬ野への行すゑ

6 42 30 96 62 15 65 73 8 36 93 90 99 10 80 56 31 44 18 82 19 13 66 7 66 89

のこる(残る)〔自ラ四〕

をちこちに成りて浅間の夕煙
 鹿の音をあとなる嶺の夕まくれ
 秋のよもかたる枕にあげやせん
 この頃しけさまさる道芝
 わきてその色やは見ゆる松の風
 うときは何のゆかしけもある
 野分せし日の霧のあはれさ
 いらかの上の月のさむけさ
 夢はあとなき野辺の露けさ
 雲をしるへのみねのはるけさ
 うちなかむるもあちきなの世や
 かたらふもはかなの友や旅の空
 身をなさはやの朝ゆふの春
 こえしとの法もくるしき道にして
 木の下もみち尋ぬるもなし
 うす雪に木葉色こき山路かな
 たのむことあれは猶うき世間に
 わりなしや勿来関の前わたり
 和歌の浦や磯かくれつゝ迷ふ身は
 はかなしやにしを心の柴の庵
 雪ふむ駒のあし引の山
 袖さえてよるは時雨の朝戸出に
 いつか心の松もしられし
 更くるまで身のうき月を忌かねて
 身のふりぬまは何おもひけん

78 41 50 63 62 77 51 93 59 1 54 61 10 7 70 8 72 82 32 92 23 86 17 31 75

のこら(残ら)〔末〕

ふる里も残らすきゆる雪をみて
 のこる(残る)〔体〕

み山にのこるうくひすの声

のどか(長閑)〔形動ナリ〕

朝露もなほ長閑にてかすむ野に

のべ(野辺)〔名〕

夢はあとなき野辺の露けさ

思ひもなれぬ野への行すゑ

のみ(副詞)

花をのみ思へはかすむ月のもと

のり(法)〔名〕

こえしとの法もくるしき道にして

のわき(野分)〔名〕

野分せし日の露のあはれさ

は

は(葉)〔名〕

うす雪に木葉色こき山路かな

は(係助)

あはれは月になほそそひ行く

すみはなれ今はほとさへ雲あち

雪ふむ駒のあし引の山

つれなしや野は霜かれの思唄

あつき日はかけよわる露の秋風に

おいてや人は身をやすくせん

60 87 49 62 21 16 1 32 61 65 6 72 30 68 11

身のふりぬまは 何おもひけん
 世にこそ道は あらまほしけれ
 夕からす ねにゆく山は 雪晴れて
 夢はあとなき 野辺の露けさ
 袖さえて よるは時雨の 朝戸出に
 うきはたゝ 鳥をうらやむ 花なれや
 うときは 何かゆかしけもある
 (こそは)
 さこそは花を あとの山こえ
 (とーは)
 枕さへ しるとはしるな 我心
 (やーは)
 わきてその 色やは見ゆる 松の風
 春そ行く 心もえやはとめさらん
 (をーかーは)
 何をかは 苔のたもとに 恨みまし
 ば〔接助〕
 出はかりなる やとりともなし
 ならばゝしほれ あらしもそうき
 さくらといへは 山風そ吹く
 花をのみ 思へはかすむ 月のもと
 いつみを聞けは たゝ秋のこゑ
 すめは山かつ 人もたつぬな
 はかーな・し〔形ク〕
 はかーな〔語幹〕
 かたらふも はかなの友や 旅の空

7 14 24 65 38 48 98 13 67 23 27 96 92 9 63 72 81 12 78

はかなしや にしを心の 柴の庵
 はしゝる〔端居〕〔名・自サ変〕
 螢飛ぶ 空によふかく 端居して
 はな〔花〕〔名〕
 うきはたゝ 鳥をうらやむ 花なれや
 咲く花も おもはさらめや 春の夢
 さこそは花を あとの山こえ
 花をのみ 思へはかすむ 月のもと
 はな・る〔離る〕〔自ラ下二〕
 はな・れ〔離れ〕〔用〕
 すみはなれ 今はほとさへ 雪るちに
 はや〔早〕〔副〕
 露もはや 置きわふる 庭の 秋の暮
 ばーや〔終助〕
 あやになれや 思たえはや
 身をなさはやの 朝ゆふの 春
 はやし〔林〕〔名〕
 冬の林に 水こぼるこゑ
 はる〔春〕〔名〕
 身をなさはやの 朝ゆふの 春
 春そ行く 心もえやはとめさらん
 は・る〔晴る〕〔自ラ下二〕
 は・れ〔晴れ〕〔用〕
 夕からす ねにゆく山は 雪晴れて
 はるけーさ〔遙けさ〕〔名〕
 雲をしるへの みねのはるけさ

8 81 76 10 80 10 58 55 21 65 96 37 9 25 77

ひ

ひ(目)(名)

あつき日は かけよわる露の 秋風に
野分せし日の 霧のあはれさ

ひ(火)(名)

いさり火も 見るもすさまじし 沖つ舟

ひかり(光)(名)

露さむし 月も光や かはるらん

ひぐらし(鶉)(名)

衣手うすし ひぐらしの 声

ひと(人)(名)

みちくる沙や 人したふらん

いつしか人になれつゝも 見む

おいてや人は 身をやすくせん

すめは山かつ 人もたつぬな

我ならて 通ふや人も しのふらん

かへらん旅を 人よ忘るな

悪めなほ 契りし人を 草の庵

心をも そめにし物を 世捨人

さそふつてまつ 佗人そうき

ひとゝむらさめ(一村雨)(名)

一村雨に 月そいさよふ

ひとゝめ・く(人めく)(自力四)

ひとゝめ・き(人めき)(用)

ふる人めきて うちそしはふく

84

100

20

97

91

46

35

14

60

74

52

88

5

43

32

87

ふ

ふ(生)(接尾)

蓬生や とふをたよりに 啣つらん

ふか・し(深し)(形ク)

ふか・く(深く)(用)

螢飛ふ・空によふかく 端居して

ふ・く(吹く)(自力四・体)

さくらといへは 山風ぞ吹く

ふ・く(更く)(自力下二)

ふ・け(更け)(用)

さよ更けけりな 袖の秋風

ふ・くる(更くる)(体)

たれとなく かねに音して 深る夜に

更くるまで 身のうき月を 忘かねて

ふ・す(臥す)(自サ四)

ふ・し(臥し)(用)

衣うつ 宿をかりふし おきわかれ

ふぢ(藤)(名)

藤咲く頃の たそかれの空

ふぢゝころも(藤衣)(名)

藤衣なこり多くも 今日ぬきて

ふね(舟)(名)

いさり火を 見るもすさまじし 沖つ舟

捨てらるゝ 片破れ小舟 朽ちやらて

ふ・む(踏む)(他マ四・体)

53

43

29

66

71

41

83

4

38

25

85

雪ふむ駒のあし引の山

ふゆ(冬)〔名〕

62

冬の林に水こぼるこゑ

岩もとすゝき冬やなほみん

ふ・る(旧)〔自ラ上二〕

2 80

ふ・り(旧)〔用〕

身のふりぬまは何おもひけん

ふる・し(古)〔形ク〕

78

ふる・き(古)〔体〕

ふるき都のいにしへの道

ふる・さと(古)〔名〕

36

露のまもうき 古里と思ふなよ

ふる里も残らすきゆる 雪をみて

ふるびと・め・く(古人めく)〔自力四〕

11 99

ふるびと・め・き(古人めき)〔用〕

ふる人めきてうちそしはふく

へ

へ(上)〔名〕

尾上の松の心みせけり

へ(辺)〔接尾〕

雲をしるへのみねのはるけさ

夢はあとなき 野辺の露けさ

思ひもなれぬ 野への行すゑ

90

8

6 72

ほ

ほそ・し(細)〔形ク・終〕

虫の音細し霜をまつ頃

ほたる(螢)〔名〕

螢飛ふ空によふかく端居して

ほど(程)〔名〕

すみはなれ今はほどさへ雲あちに

ほととぎす(郭公・杜鵑・時鳥)〔名〕

郭公なのりそれとも誰分かむ

ま

ま(間)〔名〕

身のふりぬまは何おもひけん

露のまもうき 古里と思ふなよ

まくら(枕)〔名〕

枕さへしるとはしるな我心

秋のよもかたる枕にあけやせん

かけ白き月を枕のむらすゝき

まぐれ(間暮)〔接尾〕

鹿の音をあとなる嶺の夕まくれ

まさ・る(増さる)〔自ラ四・体〕

この頃しけさまさる道芝

まし(助動・体)

何をかは苔のたもとに恨みまし

まつ(松)〔名〕

56

25

21

45

99 78

99

27

73

31

86

13

わきてその色やは見ゆる 松の風
 いつか心の 松もしられし
 尾上の松も 心みせけり
 ま・つ (待つ) (他夕四・体)
 静なる 鐘に月まつ 里みえて
 さそふつてまつ 他人そうき
 虫の音細し 霜をまつ頃
 まつーかせ (松風) (名)
 うらみかたしよ 松風の声
 まつーむし (松虫) (名)
 松虫に さそはれ初めし 宿いて、
 まで (副助)
 更くるまで 身のうき月を 忌かねて
 まへーわたり (前渡り) (名)
 わりなしや 勿来関の 前わたり
 まーほし (助動)
 まーほしけれ (已)
 世にこそ道は あらまほしけれ
 まよ・ふ (迷ふ) (自ハ四・体)
 和歌の浦や 磯かくれつゝ 迷ふ身に
 和歌の浦や 磯かくれつゝ 迷ふ身に
 今朝や身にしむ 天の川風
 更くるまで 身のうき月を 忌かねて

41 70 51 51 12 93 41 3 64 56 20 33 90 50 23

身のふりぬまは 何おもひけん
 身をなさはやの 朝ゆふの春
 おいてや人は 身をやすくせん
 み・す (見す) (他サ下二)
 み・せ (見せ) (用)
 尾上の松も 心みせけり
 みだ・さ (乱す) (他サ四)
 みだ・さ (乱さ) (未)
 行きて心を みたさんも憂し
 みち (道) (名)
 ふるき都の いにしへの道
 こえしとの 法もくるしき 道にして
 世にこそ道は あらまほしけれ
 みちーく (満ち来) (自力変)
 みちーくる (満ち来る) (体)
 みちくる 汐や 人したふらん
 みちーしば (道芝) (名)
 この頃しけさ まさる 道芝
 み・つ (満つ) (自夕四)
 み・ち (満ち) (用) ↓ みちーく
 みづ (水) (名)
 冬の林に 水こぼるこゑ
 みね (峰・嶺) (名)
 雲をしるへの みねのはるけさ
 鹿の音を あとなる 嶺の 夕まくれ
 みみ (耳) (名)

31 8 80 86 52 12 61 36 34 90 60 10 78

	みるめにもみゝにもすさひ遠さかり	79
	みやーこ(都)〔名〕	
	ふるき都のいにしへの道	36
	みーやま(深山)〔名〕	
	み山にのこるうくひすの声	68
	み・ゆ(見ゆ)	
	み・え(見え)〔用〕	
	静なる鐘に月まつ里みえて	33
	み・ゆる(見ゆる)〔体〕	
	わきてその色やは見ゆる松の風	23
	みる(見る)〔他マ上〕	
	み(見)〔末〕	
	岩もとすゝき冬やなほみん	2
	いつしか人になれつゝも見む	74
	み(見)〔用〕	
	ふる里も残らすきゆる雪をみて	11
	みる(見る)〔体〕	
	みるめにもみゝにもすさひ遠さかり	79
	いさり火を見るもすさまし沖つ舟	43
	む	
	む(助動)	
	む(終)	
	涙をたにもなくさめにせん	28
	む(体)	
	秋のよもかたる枕にあげやせん	17

	岩もとすゝき冬やなほみん	2
	おいてや人は身をやすくせん	60
	春そ行く心もえやはとめさらん	67
	いつしか人になれつゝも見む	74
	郭公なのりそれとも誰分かむ	45
	かへらん旅を人よ忘るな	46
	もの思ふ玉やねんかたもなき	26
	いてんも悲し秋の山てら	30
	行きて心をみたさんも憂し	34
	め〔已〕	
	咲く花もおもはさらめや春の夢	37
	きゆとも雲をそれとしらめや	76
	むし(虫)〔名〕	
	虫の音細し霜をまつ頃	56
	松虫にさそはれ初めし宿いてゝ	3
	むらーさめ(村雨)〔名〕	
	一村雨に月そいさよふ	100
	むらーすゝき(叢薄)〔名〕	
	かけ白き月を枕のむらすゝき	73
	め	
	め(目)〔名〕	
	みるめにもみゝにもすさひ遠さかり	79
	いぬ・く〔接尾・自力四〕	
	いめ・き〔用〕	
	ふる人めきてうちそしはふく	84

も

も〔終助〕

藤衣 なこり多くも 今日ぬきて

も〔係助〕

秋のよもかたる枕にあけやせん
 朝露もなほ長閑にてかすむ野に
 いさり火も見るもすさまし沖つ舟
 ねぬ夜半の心も知らす月すみて
 春そ行く心もえやはとめさらん
 露さむし月も光やかはるらん
 露もはや置きわふる庭の秋の暮
 露のまもうき古里と思ふなよ
 名も知らぬ草木のもとに跡しめて
 もの思ふ玉やねんかたもなき
 咲く花もおもはさらめや春の夢
 我ならて通ふや人もしのふらん
 ふる里も残らすきゆる雪をみて
 こえしとの法もくるしき道にして
 すめは山かつ人もたつぬな
 いつか心の松もしられし
 尾上の松も心みせけり
 うときは何のゆかしけもある
 いてんも悲し秋の山てら
 うちなかむるもあちきな世や
 かたらふもはかなの友や旅の空

7 40 30 92 90 50 14 61 11 35 37 26 15 99 55 5 67 57 43 39 17 29

木の下もみち尋ぬるもなし

行きて心をみたさんも愛し

いさり火も見るもすさまし沖つ舟

思ひもなれぬ野への行すゑ

〔もゝぞ〕

ならばしほれあらしもそうき

〔だにゝも〕

涙をたにもなくさめにせん

〔つつゝも〕

いつしか人になれつゝも見む

〔とゝも〕

出はかりなるやとりともなし

きゆとも雲をそれとしらめや

〔にゝも〕

みるめにもみゝにもすさひ遠さかり

みるめにもみゝにもすさひ遠さかり

〔をゝも〕

心をもそめにし物を世捨人

もと〔下・本〕〔名〕

花をのみ思へはかすむ月のもと

名も知らぬ草木のもとに跡しめて

岩もとすゝき冬やなほみん

ものゝおもふ〔物思ふ〕〔自ハ四・体〕

もの思ふ玉やねんかたもなき

ものゝを〔接助〕

心をもそめにし物を世捨人

97 26 2 15 65 97 79 79 76 98 74 28 48 6 43 34 54

もみぢ(紅葉)(名)
木の下もみぢ 尋ぬるもなし

54

や

や(助詞)△間投助・終助・係助ノ各用法ヲ含ム▽

蓬生や とふをたよりに 唧つらん

和歌の浦や 磯かくつれ、迷ふ身に

今朝や身にしむ 天の川風

みちくる汐や 人したふらん

もの思ふ玉や ねんかたもなき

かたらふも はかなの友や 旅の空

露さむし 月も光や かはるらん

岩もとすゝき 冬やなほみん

うちなかむるも あちきなの世や

秋のよも かたる枕に あげやせん

つれなしや 野は霜かれの思艸

はかなしや にしを心の柴の庵

わりなしや 勿来関の前わたり

あやにくなれや 思たえはや

咲く花も おもはさらめや 春の夢

きゆとも雲を それとしらめや

うきはたゝ 鳥をうらやむ 花なれや

我ならて 通ふや人も しのふらん

(てーや)

おいてや人は 身をやすくせん

(やーと)

ありぬやと 心みにすむ 山里に

47

(やーは)

わきてその 色やは見ゆる 松の風

春そ行く 心もえやは とめさらん

やす・し(安し)〔形ク〕

やす・く(安く)〔用〕

おいてや人は 身をやすくせん

やど(宿)(名)

松虫に さそはれ初めし 宿いてゝ

衣うつ 宿をかりふし おきわかれ

やどり(宿)(名)

出はかりなる やとりともなし

やま(山)(名)

雪ふむ駒の あし引の山

色かはる 山のしら雲 打なひき

夕からす ねにゆく山は 雪晴れて

入りにし山よ 何かさひしき

み山にのこる うくひすの声

やまーがつ(山賤)(名)

すめは山かつ 人もたつぬな

やまーかぜ(山風)(名)

さくらといへは 山風そ吹く

やまーこえ(山越え)(名)

さこそは花を あとの山こえ

やまーざと(山里)(名)

ありぬやと 心みにすむ 山里に

60

35

9

76

37

58

93

77

49

17

40

2

5

7

26

52

70

51

85

47

96

38

14

68

22

81

89

62

98

71

3

60

67

23

やまーぢ (山路) (名)	1
うす雪に木葉色こき 山路かな	
やまーでら (山寺) (名)	
いてんも悲し 秋の山てら	
やみ (闇) (名)	30
今よりいとふなかきよの闇	
や・る (遣る) (目ヲ四)	42
や・ら (遣ら) (末)	
捨てらるゝ 片破れ小舟 朽ちやらて	
ーやれ (破れ) (接尾)	53
捨てらるゝ 片破れ小舟 朽ちやらて	53
ゆ	
ゆかしーげ (床しげ) (名)	92
うときは何の ゆかしげもある	
ゆき (雪) (名)	
夕からす ねにゆく山は 雪晴れて	62
雪ふむ駒の あし引の山	81
ふる里も 残らすきゆる 雪をみて	11
うす雪に 木葉色こき 山路かな	1
ゆ・く (行く) (自力四)	
ゆ・き (行き) (用)	34
行きて心を みたさんも 憂し	
ゆ・く (行く) (体)	81
夕からす ねにゆく山は 雪晴れて	
春そ行く 心もえやはとめさらん	67

あはれは月になほそそひ行く	
ゆくーすゑ (行く末) (名)	16
思ひもなれぬ 野への行すゑ	
ゆふ (夕) (名)	6
身をなさはやの 朝ゆふの春	
ゆふーがらす (夕鳥) (名)	10
夕からす ねにゆく山は 雪晴れて	
ゆふーけぶり (夕煙) (名)	81
をちこちに成りて 浅間の 夕煙	
ゆふーべ (夕べ) (名)	75
夕の波の あら磯のこゑ	
ゆふーまぐれ (夕間暮) (名)	44
鹿の音を あとなる 嶺の 夕まぐれ	
ゆめ (夢) (名)	31
夢はあとなき 野辺の 露けさ	
よ	
よ (世) (名)	72
世にこそ道は あらまほしけれ	
うちなかむるも あちきなの世や	12
よ (夜) (名) ……よる	40
たれとなく かねに音して 深る夜に	
今よりいとふな ながきよの闇	83
秋のよも かたる枕に あげやせん	42
さよ更けけりな 袖の秋風	17
よ (助詞) (間投助・終助ノ用法ヲ含ム)	4

かへらん旅を 人よ忘るな

入りにし山よ 何かさひしき

うらみかたしよ 松風の声

露のまもうき 古里と思ふなよ

よすてーびと (世捨人) (名)

心をも そめにし物を 世捨人

よーの・なか (世の中・世間) (名)

たのむこと あれは猶うき 世間に

よーは (交半) (名)

ねぬ夜半の 心も知らず 月すみて

よ・ぶ (呼ぶ) (他バ四・体) (懸詞)

誰れ呼子鳥 啼きて過くらむ

よーぶか・し (夜深し) (形ク)

よーぶか・く (夜深く) (用)

螢飛ふ 空によふかく 端居して

よぶこーどり (呼子鳥) (名)

誰れ呼子鳥 啼きて過くらむ

よもぎーふ (蓬生) (名)

蓬生や とふをたよりに 唧つらん

より (格助)

今よりいとふ なかきよの 闇

よる (夜) (名) (一→よ)

袖さえて よるは時雨の 朝戸出に

よわ・る (弱る) (自ラ四・体)

46

22

64

99

59

59

59

57

94

94

25

94

87

87

63

42

85

85

87

63

42

87

ら

らむ (助動・体)

蓬生や とふをたよりに 唧つらん

露さむし 月も光や かはるらん

みちくる 汐や 人したふらん

我ならて 通ふや人も しのふらん

誰れ呼子鳥 啼きて過くらむ

らるる (助詞)

捨てらるゝ 片破れ小舟 朽ちらやて

る

る (助動)

れ (用)

いつか心の 松もしられし

松虫に さそはれ初めし 宿いてゝ

わ

わ (我・吾) (代名)

わーが (我が・吾が) (連語)

枕さへしるとは するな 我心

わかーのうら (和歌の浦) (名)

和歌の浦や 磯かくれつゝ 迷ふ身に

わか・る (別る・分る) (自ラ下二)

わか・れ (別れ・分れ) (用)

85

5

52

35

94

53

53

50

3

3

51

27

51

27

51

27

51

27

51

27

51

27

衣うつ宿をかりふし おきわかれ
 わきゝて (別きて) (副) 71
 わきてその色や見ゆる 松の風
 わ・く (分く) (他カ四) 23
 わ・か (分か) (末) 45
 郭公なのりそれとも 誰分む
 わす・る (忘る) (他ラ下二・終) 46
 かへらん旅を 人よ忘るな
 わたり (渡り) (名) 93
 わりなしや 勿来関の 前わたり
 わび・びと (佗人) (名) 20
 さそふつてまつ 佗人そうき
 わ・ぶ (佗ぶ) (自バ上二) 55
 わ・ぶる (佗ぶる) (体) 93
 露もはや 置きわふる庭の 秋の暮
 わり・なし (理無し) (形ク・終) 93
 わりなしや 勿来関の 前わたり
 われ (我・吾) (代名) 35
 我ならて 通ふや人も しのふらん

ゐ

ゐ (居) (接尾)
 螢飛ふ空によふかく 端居して

を

を (格助) (間投助詞・接続助詞的用法ヲ含ム)

25 35 93 55 20 93 46 45 23 71

いさり火を見るもすさまじ 沖つ舟
 いつみを聞けはた、秋のこゑ
 雲をしるへの みねのはるけさ
 きゆとも雲を それとしらめや
 虫の音細し 霜をまつ頃
 行きて心を みたさんも愛し
 たかならぬ あたのたのみを 命にて
 かへらん旅を 人よ忘るな
 更くるまで 身のうき月を 忌かねて
 かけ白き 月を枕の むらすゝき
 思の露を かけし悔しき
 うきはた、 鳥をうらやむ 花なれや
 はかなしや にしを心の 柴の庵
 鹿の音を あとなる嶺の 夕まくれ
 さこそは花を あとの山こえ
 懇めなほ 契りし人を 草の庵
 身をなさは やの 朝ゆふの 春
 おいてや人は 身をやすくせん
 衣うつ 宿をかりふし おきわかれ
 ふる里も 残らすきゆる 雪をみて
 蓬生や とふをたよりに 啣つらん
 (ものゝを) (接助)
 心をも そめにし物を 世捨人
 (をゝかは)
 何をかは 苔のたもとに 恨みまし
 (をゝだにゝも)

13 97 85 11 71 60 10 91 96 31 77 9 18 73 41 46 19 34 56 76 8 24 43

涙をたにもなくさめにせん

〔をーのみ〕

花をのみ思へはかすむ月のもと

〔をーも〕

心をもそめにし物を世捨人

をちーこち (遠近)〔名〕

をちこちに成りて浅間の夕煙

をーのーへ (尾の上)〔名〕

尾上の松の心みせけり

をーぶね (小舟)〔名〕

捨てらるゝ片破れ小舟朽ちやらて

23

65

97

75

90

53